

会 報
第87号

一般社団法人 函館文化会

〒042-0955 函館市高丘町51番1号
学校法人野又学園 函館大学内
電話・Fax (0138) 57-1175
E-mail bunkakai@host.or.jp
URL http://hakodate-bunkakai.com/

令和6年「神山茂賞」贈呈式・祝賀会

令和6年 神山茂賞 贈呈式



贈呈式会場



受賞者 久保泰氏ご夫妻



関係者による記念撮影



祝賀ステージは市川須磨子氏のマリンバ演奏

(写真撮影: フォトスタジオ青山)

令和6年「神山茂賞」は、松前町在住の久保 泰氏に贈呈しました。贈呈式は、受賞された久保 泰氏のご内助、関係者をはじめ、ご来賓やこれまでの受賞者、函館文化会会員が集い、函館国際ホテルで開催しました。

贈呈式後、久保氏による記念講演、引き続きの祝賀会は、マリンバ演奏による祝賀ステージで始まり、お祝いのメッセージや花束贈呈、松前町の紹介ビデオの上映など、華やかな中にも和やかな雰囲気での祝賀会となりました。(贈呈式・祝賀会の詳細は4ページに)

函館文化会 会報「巴響」 第87号 目次

◇令和6年神山茂賞贈呈式・祝賀会.....	1	・旧戸井町の“海”物語	吉澤 慶昭.....13
◇令和7年度定時総会終わる.....	2	・思い出深い恵山の人々と埋蔵文化財	館 和夫.....14
～事業報告・決算を承認～		・恵山の“つつじ”	松本 光隆.....16
◇函館文化会「ホームページ」「ブログ」もご覧下さい...	2	・地域性を生かした実践	山田 肇.....18
◇会長挨拶「会長就任にあたって」	櫻井 健治...	・唐渡法華精神(スピリッツ)の再現を	川口 英孝.....20
◇函館文化会役員名簿.....	3	・コンブ養殖漁業を成功へと導いた先人の歴史	芝井 穰.....21
◇令和6年神山茂賞は久保泰氏に贈呈.....	4	・誰もが楽しめる施設を目指して	佐藤 安浩.....23
・受賞記念講演「家臣名簿の編集を終えて」久保 泰...	4	・平成大合併における「歴史と文化の継承」	根本 直樹.....24
◇令和7年神山茂賞は門脇義治氏に贈呈.....	5	原稿募集・次回のテーマは「我がふるさと函館」.....	26
◇函館文化会講演会		◇特別寄稿	
「もし箱館に黒船が来なかったら」	井上 能孝...	・碧血碑建立150年	福島 誠.....27
「レイモンさんと函館」	植松三十里...	・“箱館通宝”鉄銭の謎	安木新一郎.....29
◇第14回市民公開講座		・函館山から下ろされた観音様	筒井 英順.....32
「函館競輪がもたらしたもの」.....	8	◇函館文化会への図書等の寄贈.....	34
◇第20回卓話		◇函館文化会メールレターを配信します.....	34
「明治25年 函館元町 坂の上の白亜の洋風校舎」	今井 雅子...	◇会務報告	
◇追悼 函館文化会前会長長平原康宏氏逝く.....	10	・令和6年度事業報告.....	35
◇特集 函館の歴史と文化を語り継ぐ⑩		・令和6年度収支決算.....	37
～テーマ「旧4町村」～.....	11	◇函館文化会会員名簿(令和7年10月1日現在).....	38
・渡島東部4町村との合併から20年を迎えて		◇編集後記.....	38
近江 茂樹.....	11		

令和7年度定時総会終わる ～ 事業報告・決算を承認 ～

一般社団法人函館文化会では、令和7年度定時総会を5月28日（水）午後1時30分からプレミアホテルーCABIN PRESIDENTー函館において、会員総数160名のうち会員128名（委任状出席を含む）が出席し開催しました。

提出された議案・報告は全て原案のとおり承認・了承され、無事終了しました。

以下、定時総会の内容について、その概要をお知らせします。

定時総会は、櫻井健治会長の挨拶後、定款の定めにより会長が議長となり議事に入りました。

今定時総会に付議された議案・報告は

議案第1 令和6年度事業報告について

議案第2 令和6年度収支決算及び監査報告について

報告第1 令和6年度収支補正予算について

報告第2 令和7年度事業計画について

報告第3 令和7年度収支予算について

報告第4 函館文化会「講演会」の開催について



の6件で、議案第1、議案第2及び報告第1は関連があることから事務局から一括して説明、次いで監事から5月19日実施した監査について「収支決算については、収入・支出ともに適正に執行されており、また、事業も事業計画に基づき適正に行われていたと認める」との監査結果の報告があり、審議の結果、いずれも満場一致で承認・了承されました。

なお、承認された令和6年度事業報告・収支決算については、別掲（35～37ページ）のとおりです。

また、3月26日開催の令和6年度第5回理事会で議決した令和7年度事業計画・収支予算については、報告第2及び報告第3として一括説明があり、いずれも満場一致で了承されました。

新年度の事業の主なものは、「神山茂賞の贈呈」を継続して実施、同日開催の「受賞者を祝う会」には多くの会員に参加を呼びかけ、会員交流の場にもすること、「函館文化会講演会」は、8月23日（土）函館市中央図書館で、東京在住の歴史小説家の植松三十里氏を講師に「レイモンさんと函館」を演題に開催予定であること、さらに「郷土の歴史・文化等を学び・探求しながら、受け継がれてきた“郷土の歴史と文化”を後世に継承する」ことを目的として開催している「市民公開講座」は今年度から「郷土の歴史と文化伝承講座」に名称変更して、様々なジャンルの方を講師に迎え、継続して実施することが報告されました。

函館文化会「ホームページ」「ブログ」もご覧ください

「函館文化会」の知名度の向上と活動の推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び案内、報告などの情報を、インターネットを通じて全国・世界に発信することを目的に函館文化会「ホームページ」、「ブログ」を開設しております。

一度ご覧いただき、ご感想・ご要望など事務局にお寄せください。アドレスは、次のとおりです。

- ・ホームページ <http://hakodate-bunkakai.com/>
- ・ブ ロ グ <http://blog.livedoor.jp/bunkakai/>



会長挨拶

会長就任にあたって



一般社団法人 函館文化会 会長 櫻 井 健 治

就任のご挨拶に先立ち、前会長の平原康宏氏が本年1月7日に急逝され、その悲報にただただ驚くばかりでした。令和4年5月に組織が新体制となり、氏の卓越したパワーで当会を牽引していった下さるものと期待していましたが……。今は心から哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りするばかりです。

1月28日の当会理事会において、平原会長の後任として、会長を仰せつかることになりました。当会は明治14年（1881）11月3日に発足して以来、多くの先輩諸氏の方々の不断のご尽力により発展してきた伝統ある「函館文化会」であり、身の引き締まる思いで一杯であります。微力ではありますが、精一杯努力し取り組んで参りたいと考えておりますので、会員の皆様方におかれましては、どうか特段のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

函館文化会の沿革史を繙（ひもと）きますと、「函館教育会」（明治37年～昭和20年）と称していた時代に、二代目渡辺熊四郎氏が谷地頭町の土地を、渡辺源太郎氏（三代目熊四郎氏）は金品を、品田弥一氏は亡父鹿造氏の遺志により金品を寄付し、明治43年5月に函館最初の運動場（グラウンド）が完成し、運動会や野球等各方面で活用されたといえます。

しかしこのグラウンドは、昭和9年3月の大火によりまして、被災者のための応急住宅が建てられることとなり、その後市の区画整理によって住宅地に指定されたことから、グラウンドとしての使用は出来なくなりました。土地は函館文化会の所有でありましたので、これを賃貸借による有効活用により、その貴重な財源収入を活用すべく、定款で「郷土の文化を顕揚し、その振興発展を図る」ことを目的に掲げ、「（1）教育、科学及び芸術の振興 （2）生活文化の向上 （3）郷土文化の推進 （4）図書の刊行 （5）その他郷土文化振興上必要な事項」といった事業を展開してきていることを、私達はしっかりと知っておくことが必要であろうかと思うのです。

また函館文化会は函館地域にとどまらず、渡島・檜山管内の皆様にも広く門戸を開き、数多くの会員の方々が活躍しておられます。

創立144年を迎えた今、私達は函館文化会のさらなる充実発展を図り、進化していくためには、会員相互の交流を一層深めることは勿論のことですが、関係機関や諸団体等との連携、さらには是非とも若年層の皆様にも入会していただく必要があります。

まずは来るべき創立150年に向けて、皆様としっかりと手を携え努力して参りたいと考えております。一層のお力添えをお願い申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

一般社団法人 函館文化会 役員名簿

（令和7年10月1日現在）

○会 長	櫻 井 健 治	○理 事	佐々木 茂	○理 事	山 本 真 也
○副 会 長	繪 面 和 子		佐 藤 育 子		若 山 豪
○常務理事	上 田 昌 昭		須 藤 由 司	○監 事	佐々木 俊 克
○理 事	小笠原 勇 人		中 野 晋		宮 脇 智恵子
	小 熊 庸 介		藤 井 方 雄		

前会長の平原康宏氏は令和7年1月7日に、また理事の藤井良江氏が令和7年6月19日に逝去されました。生前当会運営に多大なるご尽力をいただきましたことに深謝申し上げ、ここにご冥福をお祈りいたします。

令和6年 神山茂賞

松前町在住 久保泰氏に贈呈

函館文化会では、毎年、郷土文化高揚のための郷土史研究者奨励事業の一つとして、郷土史についての優れた研究、発掘、収集、出版などに事績を残された個人・団体に「神山茂賞」を贈っていますが、令和6年は「松前藩家臣名簿」を上梓された久保泰氏（松前町在住）に「神山茂賞」を贈呈しました。

贈呈式は、受賞された久保泰氏の関係者の皆様をはじめ、来賓やこれまでの受賞者、函館文化会会員など71人が出席して故神山茂氏の命日に当たる11月7日（木）函館国際ホテルにおいて行いました。

函館文化会 平原康宏会長から「久保氏が編纂、上梓した『松前藩家臣名簿』は、誰もが松前藩家臣の詳細な履歴に触れることが可能となり、郷土史研究者にとっては大きな意義を持つ。久保氏の弛まぬ調査研究によって成し遂げられたこの優れた業績は、郷土の歴史探究と継承にとって極めて貴重なことで、郷土文化の一層の振興に寄与するものであり、今後さらなる活躍を期待する」と讃え、神山茂賞選考委員会委員長 杉浦清志氏から審査経過報告、松前町長 若佐智弘氏と函館市教育委員会教育長 藤井壽夫氏お二人から祝辞があり、受賞された久保泰氏からは「一生懸命やってきたことがこうして評価され喜びに堪えない」との謝辞が述べられました。

贈呈式に引き続き、久保氏による『家臣名簿の編集を終えて』と題しての受賞記念講演が行われました。久保氏は講演の中で、家臣名簿の編集に取り組む動機や名簿を作ることによって家臣の数の移り変わりが見えてきたこと、また、整理が必要で盛り込めなかったものも多く、編纂は終わりのない仕事で気力、体力のある限り続けたいと決意を語られていました。

受賞者を囲んでの祝賀会は、祝賀ステージでマリンバの市川須磨子氏と久保悦子氏のピアノ伴奏による“愛の喜び”などの演奏で始まり、出席された来賓や既受賞者の方々の紹介、お祝いスピーチなどに続き、松前町の郷土芸能を紹介するビデオが上映されるなど、華やかな中にも和やかな雰囲気の中で盛会裡に終了いたしました。



平原会長から久保泰氏に賞状を贈呈

令和6年「神山茂賞」受賞記念講演

家臣名簿の編集を終えて



令和6年神山茂賞受賞者 久保 泰

家臣名簿を編集するに至った動機は、昭和49年(1974)にTV放映されたNHKの朝ドラ「北の家族」のタイトルバックに松前城が使用されたことから松前町を訪れる観光客が増え、その観光客の中に松前藩をルーツとする人たちが先祖探しにやってくるようになり、また、松前町に自分の先祖についての問合せが多数寄せられ、それらの問合せに答えるために松前藩家臣名簿の編集に取り組んだ。しかしながら、肝心要の松前藩の公文書などの史料が箱館戦争や廃藩置県などによりほとんど残されて

いなかったため、家臣の家や商家に残されていた資料等を根気よく探し出して紐解くことなど苦労続きであったが、何とか5千名を超える家臣の出自や経歴を編集することができた。また、家臣名簿の編集から見てきたこととして、18世紀の終わりの寛政時代・松平定信の時代に松前藩に仕えていた一般武士から足軽まで約350人の家臣がおり、それぞれ名前と格付け等は判明したが、それ以前の家臣数となるとよく分かっていないのが実情で、寛文9年(1669)に勃発したシャクシャインの戦い時には100人弱の侍しか分かっていない。また、松前藩が無くなる明治4年(1872)の最終的な段階での家臣数は1,900人と増えているが、これは箱館戦争があったことからとにかく戦闘要員を確保するために家臣の家族から足軽に至るまでの頭数を増やしたものと思われる。

さらに、松前藩の家臣の中には特異な家臣たちがおり、いくつか紹介する。

- ・板垣(牧山)修卿は松前藩の侍医だった人だが、咸臨丸で勝海舟とともに米国に渡った人物で、帰国後は幕府に引き上げられ、その後は不明。
- ・杉村良衛(永倉新八)は松前藩を脱藩後、新選組に参加して数々の事件に関わったが、明治3年には江戸に居られず松前藩侍医の杉村家に養子に入り杉村良衛と改名。
- ・中川五郎次はシベリアに抑留されていた時に種痘術を学び捕虜交換で帰国後、松前藩の家臣となって種痘術を施し、我が国の種痘術の創始者とも言われた。



松前城の天守と大手門

- ・平田貞常は、多分藩主の命で間宮林蔵よりも早く間宮海峡を渡った人物なのだが、当時幕府の了解無くして渡ったため公にはできないため、間宮林蔵が間宮海峡を発見したことになる。
- ・滝沢宗伯は、南総里見八犬伝の著者である滝沢馬琴の長男で、馬琴が8代藩主の松前道広と親交があったことから松前藩の江戸屋敷に出入りを許された侍医として勤めていたことが分かっている。

結びになるが、作家の故森村誠一の「今日が自分の生涯の中で一番若い時だ」との言葉を残しているが、まだ未解明の藩士が500人程おり、それら資料の信憑性などをこれから検証していき、今後第3、4、5版の出版に向けて今後も引き続き調査探求を続けていきたい。

令和7年 神山茂賞は、門脇義治氏に



郷土史研究に貢献した個人・団体を顕彰する「神山茂賞」を、令和7年は門脇義治氏に贈呈します。

門脇氏は、自身が生まれ育った湯川地区の歴史に大いなる興味関心を抱き、湯川に関わる文献や史資料、写真や映像等を収集し、これらの歴史資料を基に地元の町会や学校等で地域の郷土史の伝承活動にも力を注いできました。このたび「湯の川物語」を自費出版され、今後さらに湯川地域を通じて歴史の大切さを感じてもらえる活動を続けていきたいとの意欲に対して、「まちの郷土史家」として高く評価されたものです。

贈呈式は、11月7日(金)、函館市大手町の函館国際ホテルにて行われ、贈呈式後、受賞された門脇氏による記念講演も予定しております。多くの会員の出席をお願いいたします。

令和6年度 函館文化会 講演会

もし箱館に黒船が来なかったら ～ペリー来航170周年に想うこと～

箱館英学研究家・函館国際俳句会会長 **井上能孝**



講師の井上能孝氏

函館文化会では、文化振興事業の一環として函館市中央図書館との共催で毎年「函館文化会講演会」を開催しているが、令和6年度は10月12日（土）中央図書館視聴覚ホールを会場に開催、ホールをほぼ埋める130名を超える多くの会員や市民の皆さんの参加をいただき盛況のうちに終了した。

この講演会は、昨年ペリー提督が箱館に来航した安政元年(1854)から170周年という節目にあたることを記念しての企画で、講師に箱館英学研究家で函館国際俳句会会長の井上能孝氏を迎え、当時に思いを馳せながら「ペリー提督が箱館に残したもの」、また、逆説的に「もし箱館に黒船が来なかったら」を演題に、主にペリー提督の箱館での足取りなどを解説していただいた。

講演の中で、ペリー提督は米国捕鯨船の補給地として松前港や江差港の開港を徳川幕府に対し要求してきたが、松前は大名がいる、江差は日々300隻を超える船が出入りすると断られ、それでも粘り強く開港を求めるペリーの姿勢に根負けした幕府は「それならば箱館なら仕方ないだろう」と当時人口9千人余りの寒村だった箱館の開港を認めたと述べ、俳人でもある井上氏から来航時のペリー提督にまつわるエピソードなどを俳句にして披露された。

また、講演はクエスチョン形式で「ペリーが何故箱館

にやって来たのか?」、「弥生坂から箱館港を一望してペリーは何とつぶやいたか?」、「ペリーが青空マーケットで箱館土産として買ったものは?」などの問いかけに、興味あるエピソードを交えながら話され、聴講された皆さんは大変興味深く聞き入っていた。

最後のクエスチョン「もし箱館に黒船が来なかったら?」の答えとすれば、今の函館の異国情緒豊かな町並みはおろか「あれもない、これもない、何もない」のナイナイ尽くしの街になっていただろう。黒船を率いてやってきたペリー提督は、箱館に西洋文化育む素晴らしいものを置いていったと井上氏は結論付けた。

講演の結びで、井上氏からペリー来航時の歴史を研究して「箱館英学事始め」を出版したことで、函館文化会が平成元年に創設した「神山茂賞」を第1回目に受賞できたことは全くもって名誉なことであったと改めて感謝の弁を述べられるとともに「今自分は高齢（93歳）の身となったが、歴史学研究には終わりはなくまだまだ解明できていない部分も多いので、これからも立ち止まりながらも皆さんの力も借りながら郷土の歴史を掘り下げて行こうと思っている」との言葉に、聴講された方々から温かい励ましと労いの拍手が沸き起こっていた。



視聴覚ホールを埋めた聴講者

（講師の井上能孝氏は令和7年1月2日に逝去されました。ここに改めて、ご冥福をお祈りいたします）

令和7年度 函館文化会 講演会

レイモンさんと函館 ～カール・レイモン創業100年を迎えて～

歴史小説家 植松 三十里



講師の植松三十里氏

令和7年度の函館文化会講演会は、令和7年8月23日（土）函館市中央図書館視聴覚ホールを会場に開催した。会員や市民の皆さん140名に参加をいただき盛況のうちに終了することが出来ました。

今回の講演会は、函館カール・レイモン創業100年の記念すべき年にあたることから、「胃袋の宣教師」と呼ばれたハム・ソーセージづくりのマイスター、カール・レイモン氏とコウ夫人をモデルにした小説を5年前に書き下ろした東京在住の歴史小説家・植松三十里氏を講師にお迎えして、函館の地を愛し頑固なまでにドイツ式製法でハム・ソーセージ作りに生涯を捧げたカール・レイモン夫妻の知られざるエピソードなどを講演いただいた。

講演の冒頭で、講師と函館の関わりについて述べられ、45年前に当時函館で学生時代（北大水産学部）を過ごしていたご主人からプロポーズを受けたことや札幌在住時に勤務していた建築設計事務所の関係で西部地区の伝統的町家のペンキ塗り活動に携わっていたこと、また東京に移住した後にフリーランスの作家になってからも文筆活動の取材で再び函館の街を訪れるようになり、2020年には集英社から著書「レイモンさん 函館ソーセージマイスター」を発行できたことなど、函館の街と不思議に縁があったことを話された。

本題の「レイモンさんと函館」では、故郷のカールスバートからノルウェー、ヨーロッパ、アメリカと世界を股にかけて食肉加工技術を学んだレイモンさんが日本の北洋漁業でも仕事に従事するようになり、その時の函館

の定宿であった勝田旅館でその看板娘であったコウさんと駆け落ちするといった国際的なラブストーリーが生まれ、その後親の許しを得て帰国すると函館駅前でハム店を開いたのが今から100年前。コウさんの内助の功もあって函館駅前から五稜郭駅前、大野駅（今の新函館北斗駅）へと事業拡大していき、満州にまで畜産指導に単身赴任するが、昭和13年に満州から帰国すると当時の戦況の影響もあって大野工場を強制買収されて製造不可能となり、元町に移り住んだ。終戦後の昭和23年になって自宅横に工房を開き、小規模ながらも日本人の食生活の向上に貢献するため余計な添加物を加えない手作りハム・ソーセージを作り続けたカール・レイモン夫妻の波乱の生涯を解説されて、我ながら良い本を書いたなと思っているとコメントがあった。

また、講演の最後では、カール・レイモンが全国的にあまり知られていない現状に函館の街全体でもっと盛り上げていけば函館観光にも寄与し、元町のレイモンハウスにも行列ができるようになるだろうと今後の知名度アップに期待していると述べていた。

さらに、講演終了後の質疑応答で聴講者5人から質問があり、中でも小学校で郷土史学習を担当している先生からは次の学習教材として講師の著作本を参考にカール・レイモンさんを取り上げてみたいとの発言に対し、満面の笑みを浮かべ是非地元で盛り上げて欲しいと言葉を結んだ。



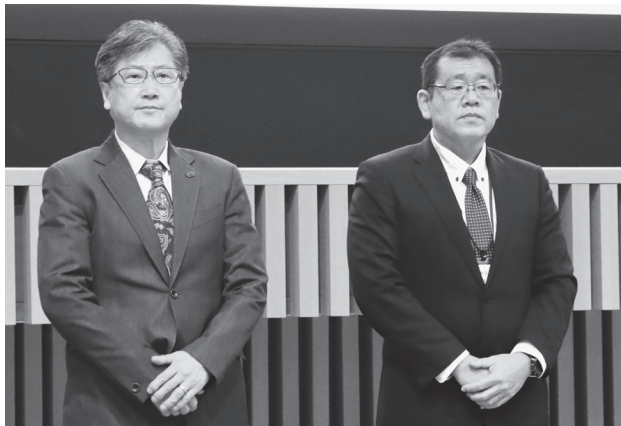
視聴覚ホールでの講演会の様子

第14回 市民公開講座

函館競輪がもたらしたものの

全国競輪施行者協議会常務理事 **伊与部 隆**
 函館市競輪事業部長 **田村 隆弘**

函館文化会では、郷土の歴史・文化等を学び・探究しながら、受け継がれてきた「郷土の歴史と文化」を後世に伝承することを目的に「市民公開講座」を実施しており、第14回目は令和7年3月12日（水）に会員・市民50の参加の下函館競輪場テレシアターを会場に開催しました。



講師の伊与部隆氏（左）と田村隆弘氏

今回は、「函館競輪がもたらしたものの」をテーマに題し、二人の講師の方が登壇、最初に東京都にある公益社団法人全国競輪施行者協議会からおいでいただいた常務理事の伊与部隆氏と函館市競輪事業部長の田村隆弘氏から、終戦後の地方自治体の財政困窮を救った競輪事業の歴史的背景と競輪事業を取り巻く現状について解説いただいた。

伊与部氏からは、競輪事業は昭和23年(1948)戦後の財政難打開のため福岡県の「小倉競輪場」で誕生したのが始まりで、自転車競技法に基づき運営されており、一時ギャンブル性を問われ撤退する自治体もあったが、現在は全国に43競輪場を有している。競輪の売上は公営競技の中では中央競馬、ボートレースに次ぐ3番目で1兆2千億円（令和6年度）を超えており、また、競輪選手は2,400人ほどで日本のプロスポーツでは選手数が最も多い競技とされていることなどの説明があった。

また、函館市競輪事業部長の田村隆弘氏からは、昭和25年(1950)に全国47番目に函館競輪場として開設され、今年で開設75年を迎え、平成10年(1998)には全国初のサマータイム（薄暮）をはじめ話題を集めたこと、競輪が開催されない冬場はスケート場として活用していることなど、これまで歩んできた75年の歴史や特徴などを紹介し、また、これまで競輪事業により売り上げた収益の中から300億円程を函館市の財政に繰り出し、それらは函館市の文教施設や公営住宅整備などに使われてきたことなどを詳しく話されていた。

講座の最後には、競輪の魅力と楽しみ方として場内レース実況アナウンサーの池田牧人氏から函館出身の注目選手などが紹介されるとともに、昨年函館競輪場で開催された迫力溢れるレース映像が大型ビジョンに映し出され、受講者の多くは白熱したレース模様に固唾を飲んで見入っていた。

また、講座終了後には受講者が二組に分かれて、普段なかなか見ることのできない特別観覧席や個室のロイヤル席、選手が走行するバンクなどの普段立ち入ることの出来ない競輪場施設内を函館市競輪事業部の職員の方に案内していただき、講座に参加した会員・市民の方には函館競輪場をより身近に感じて貰えたようである。



競輪場シアターでの講座の様子

第20回 卓 話

明治25年 函館元町 坂の上の白亜の洋風校舎

画家 今 井 雅 子（東京在住）

函館文化会では、毎年定時総会終了後に「卓話」を開催しています。この「卓話」は、総会に集まって議案の審議を終え、それで解散も如何なものか、折角集まって頂いた機会を活用して会員皆さんの話を聞きながら、より絆を深めようと始められたもので、今回で20回目を数えました。



講師の今井雅子氏

今回は、東京在住の当会会員で画家の今井雅子さんにお願いして、「明治25年 函館元町 坂の上の白亜の洋風校舎」と題し、今井さんご自身が描かれた作品を映像で紹介していただきながら、明治25年当時の元町に存在した6つの学校を解説していただき、出席された会員の方々に当時の元町の風景、町並みを思い浮かべていただいた。

明治25年（1892年）の函館発祥の地である元町地区には、現在の遺愛幼稚園の場所に遺愛学院の前身の遺愛女学校が建っていたほか、函館白百合学園の前身の聖保禄女学校、函館商業高校の前身の庁立函館商業学校、また現在の聖ヨハネ教会の場所には靖和女学校が、またハリストス正教会の場所には正教女学校、アイヌ民族の教育施設としてアイヌ学校など6つの学校が集まる文教地区で、毎朝通学する生徒たちの明るい声が響き渡っていた。

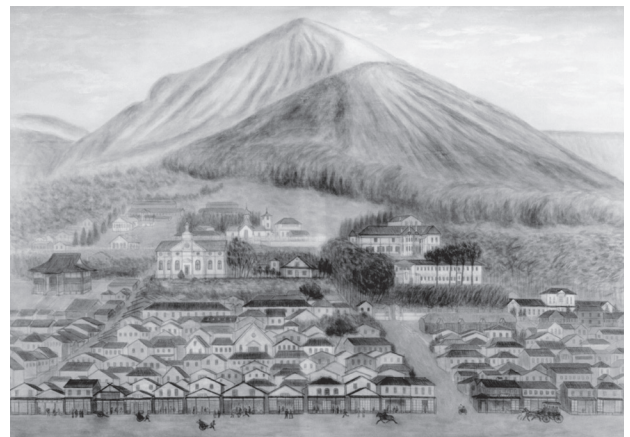
坂の下の方の大通り沿いには、商店、銀行が軒を

連ね、当時の函館は道内で最大の人口を有し、賑わいを見せていた。

坂の上の教会や学校などは、西洋人に教わった大工さんが建てた白亜の洋風建築、明治中頃の建物は白ペンキ塗りが主流だった。しかし、これらの校舎は明治40年（1907年）の大火で焼失してしまっている。

今井さんはその焼失前のこの地域の様子を再現したいと古い写真や地図などを基に調べて油絵に描き、再現した油絵をスライド上映しながら、それぞれの学校の建物の特徴や学校の歴史などを紹介したほか、各学校の校舎を粘土で作り、大三坂や八幡坂沿いに配置したほか、当時と変化の少ない区画や石垣、坂道を再現してのジオラマを撮影したショートムービーも上映し、出席していた会員はまるで明治の町並みを散策しているような感覚も味わいながら、興味深く耳を傾けていました。

なお、今井さんはこれらの作品を地元の人にも観てもらいたいと一昨年に市立函館博物館郷土資料館と地域交流まちづくりセンターで展示会を開催したが、今年の11月には函館市内の丸井今井デパートで「函館弁天台場」を題材にした作品展示会をの開催を予定しており、「こちらも時間がありましたら、是非鑑賞していただきたい」とPRされていた。



明治25年函館山から大通（現在の電車通り）までの風景

追悼

函館文化会前会長 平原康宏氏 逝く

函館文化会前会長 平原康宏氏が令和7年1月7日突然の病に倒れ、89歳でご逝去されました。

平原氏は長年にわたり函館文化会の役員として、また、函館文化会会長として活動基盤を強固なものに築き上げられたご尽力に感謝を申し上げますとともに、ご冥福をお祈りいたします。合掌



平原康宏前会長は、昨年暮れの12月26日に函館文化会の仕事納めを兼ねての正副会長で年内最後の打合せには元気な姿を見せ、その後事務所をお借りしている函館大学の野又淳司学長への年末挨拶の後、大学の1階にある喫茶室でコーヒーを飲まれながら、「来年もよろしくな」と言って別れて10日後の突然の出来事でした。

平原氏は、高等学校を卒業後の昭和29年に函館市役所に奉職され、テクノポリス推進室長、青函トンネル開通記念博覧会事務局長、はまなす国体事務局長、議会事務局長、商工観光部長などを歴任し、函館市役所を退職された平成6年からは函館商工会議所専務理事として10年間経済界でも活躍されました。中でも、青函博覧会では中国からパンダの誘致にご尽力され博覧会を盛り上げられましたが、反面、天候に恵まれず特に開会式は土砂降りの雨に見舞われ、庁内外から「雨男」という好ましくない称号をもらい、本人もそのことを気に掛けて、出退勤の際はお守り代わりか常に長傘を持参するというエピソードの持ち主でもありました。

函館文化会においては、平成12年に理事に、平成28年に副会長に就任され、令和4年の役員改選では金山会長の後を引き継ぎ会長に就任しました。当初は「私は文化人でない」と断り続けておりましたが、金山会長から「永年役員をお願いして、文化会のことをよく知っているのは、平原さんだ」の一言で引き受けられ、会長就任後は文化会の事業に対して常に全体に気配りをしながら、安島元会長、金山前会長の思いを引き継ぎ、これまで以上に内容の濃い事業を展開してこれ、また、間もなく迎える函館文化会発足150年に向けて、新時代の函館文化会の望ましいあり方への道筋を探っておられました。

平原氏のご子息からは「父は、函館文化会とゴルフの話をする時には目を輝かせており、この2つが生きがだったのかも知れない」と話しており、おそらく任期途中での逝去は無念だったのではないかと感じております。

金山会長から託された思いとともに、次の時代における函館文化会のあるべき姿を描こうとしていた平原会長の熱い思いを、引き継いでいかなければならないと考えております。(編集子)

理事 藤井良江さん、企画広報委員 小山直子さん ご逝去されました

函館文化会の理事の藤井良江さんが6月20日に、また、企画広報委員の小山直子さんが8月4日にご逝去されました。お二人には女性の視点から函館文化会の運営に意を注がれ、今後にご活躍を期待していただけに残念でなりません。お二人のこれまでのご尽力に感謝するとともに、ご冥福をお祈りいたします。

特集 函館の歴史と文化を語り継ぐ

10

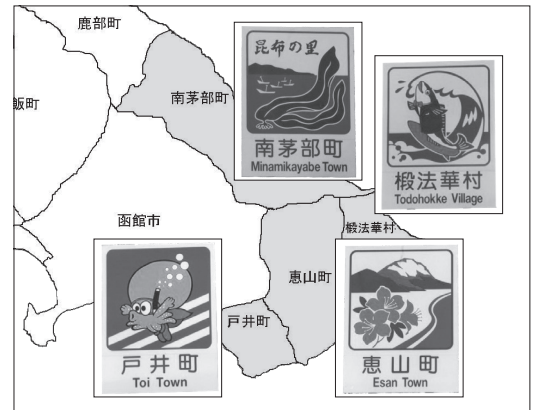
～ テーマ「旧4町村」～

函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化の伝承」に因み、毎年発行する会報に函館の歴史と文化をテーマに取りあげ、会員の皆さんにそのテーマに沿った思いやエピソードなどを綴っていただき後世に残していきたいと、特集「函館の歴史と文化を語り継ぐ」を継続して取り組んでおります。

第10回を迎える今回のテーマは、“旧4町村”です。

平成16年12月、平成の大合併と言われた函館市と戸井町、恵山町、榎法華村、南茅部町の旧4町村が合併してから20年が経ちました。旧4町村それぞれの地域には特産物や特色あふれる観光スポットなどがあり、それぞれの歴史と文化を有しています。そんな“旧4町村”にまつわる話を9人の会員の皆さんから投稿いただきましたので、ご紹介いたします。

なお、次号（第88号）第11回のテーマは、我がふるさと“函館”としました。函館に住んでいる私たちには意外と気付かない函館のひと・街・文化・歴史などの知らない部分も多くあるように思われます。函館を離れてみて思う我がふるさと“函館”、函館に移住してみて感じる 我がふるさと“函館”、生まれ育った街 我がふるさと“函館”をテーマに、大いに語って頂きたいと思います。応募規定等は26ページを参照ください。



渡島東部4町村との合併から20年を迎えて

近 江 茂 樹



平成16年（2004）12月1日、「平成の大合併」道内第1号として函館市、渡島管内戸井町、恵山町、榎法華村、南茅部町との合併が成立した。当時函館市の合併協議会事務局を担い、合

併から20年を経た今改めて当時を思い起こしながらこの合併と将来への想いを綴ってみた。

旧4町村は地方交付税が減り、財政難が深刻化しており、編入合併という形態ではあったが、函館市が救済した格好であり、協議を進める上で「バラ色」を求める選択肢は最初から持たなかった。行財政改革にしっかり取り組み、法期限内で合併して財政支援を最大限活用する

事が基本としてあったからである。

住民サービスをこれ以上低下させないことに重点を置き、「住民生活を維持」し、「安心安全なまちづくり」を進めることが、結果として住民が良かったと思える合併に繋がることを第1に考えた。

また協議進展の大きな要因となったのは、当時の井上博司函館市長と4町村長との厚い信頼関係が最後まで保たれたことも大きかった。首長の思いだけが先行し、破断する例が多くあることも他地域では散見されたが、公平平等に対応し信頼関係の下で協議を進めたことで、5市町村の推進体制は最後まで壊れることがなかった。

もう一方で、市町村議会議員の懸念払拭にも力を入れた。議員の考え方に偏りもあったが、函館市議会議員で

構成した「合併調査特別委員会」の開催は通算で23回を数えるなど、合併を何としても果たすべき思いで積極的な協議が進められた。

また4町村職員に対する配慮にも意を注ぎ、私自身も4町村には延べ100回を超えるほど足を運び、地域の実情や職員の声を丁寧に拾い集めた。合併協議会の事務局職員も、函館市から9名4町村から4名の総数13名で事務処理を進め、私が今でも自慢できるのは、期間の定めがある中でチームワーク良く、精力的に仕事を成し遂げた優秀な職員に巡り合えたことで、合併後、事務局に集った職員うち、実に8名が函館市の主要部長を務める人材だった。

井上市長は道南の母都市としての役割を果たしたい思いがあり、「合併協議会」や「地域懇談会」を数十回、さらに「議会調査特別委員会」も間断なく実施するよう指示があった。

「国際観光海洋都市」を目指すと、合併記念式典の式辞で市長は力強く語り、また「合併建設計画」では、「豊かな海が未来を拓く」をメインテーマに計画づくりを精力的に進めた。

国は合併により総合的な活力が強化されると強調し、函館市は「中核市」の指定を下関市と同時に認定され、数々の権限が国や北海道から移譲され、事業推進のスピード化が図られた。

また、300億円以上の合併特例債の活用により、「函館アリーナ」や「国際水産・海洋総合研究センター」、「市民会館の改修」、「縄文文化交流センター」、「恵山コミュニティセンター」の完成など、これまで着手困難な大型

プロジェクトの整備も順調に進められ、合併後、函館市は特例措置の活用で公共施設建設や、中核市の指定のもとで合併前では実現が難しかったプロジェクトも推進できる環境に変わった。

観光だけに頼るのではなく、「国際観光海洋都市」としての確かな位置付けに向けた基盤づくりが、持続可能な次世代へつながる大きなインパクトであると考えている。

合併して20年を経ての今の姿、人口減少による避けて通れない現状に直面し、取りも直さず疲弊感も著しくなった。加えて地場産業の要である水産業も減速傾向に歯止めがかからない状況にある。

旧4町村の人口衰退は著しく、樫法華地区に至っては半減するなど厳しい現状を余儀なくされており、住民自治の仕組みも細りつつある。人口減少や住民サービスの低下などによる利便性の低下が指摘されているが、この先においても行政サービスには限界があることを自覚し、市民も行政と協働する大切さを認識して行かなければならない。

恵まれた歴史・風土・伝統、さらには産業の振興に今一度原点に立ち返って、各界各層が共に汗する気概が必要であるとする。行政と住民との物理的・心理的距離の拡大や、首長や議員がいなくなることによる細やかな民意の吸収はさらに遠のく傾向にある。

今後においては行政のみに頼ることなく、場合によっては行政の一部を住民に返す「相互運営形態」を模索していく必要もあると思う。

1市4町村が一緒になって20年を経過したが、将来を見据えたときにまだ発展途中であるという希望を持ちつつ、南北海道の母都市としての責任と役割を市民とともに果たすことにより、「新函館市」としての将来展望が描けるものと信じている。

合併そのものに影が色濃くなっているが、必ずや光が差し込むことを心から望んで止まない次第である。



おうみ しげき 昭和23年函館（旧亀田市）生まれ。昭和46年日本大学卒業、同年旧亀田町に採用され、函館市福祉部長、企画部長、常勤監査委員を歴任し、平成24年退職、その後、社会福祉法人共愛会常務理事、理事長を務め令和5年に退任



平成16年12月 函館市と4町村合併記念式典

旧戸井町の“海”物語

吉澤 慶 昭



私の出身地は松前郡福島町で、函館工業高校土木科を昭和36年(1961)に卒業後、鹿島建設(株)に入社し、北海道や大阪府で土木工事の仕事をしていた。知人の紹介により旧戸井村で土木技術者がいないので、是非来てほしいと言われ、昭和41年(1966)8月1日付けで、戸井村建設課土木係に奉職した。

土木の技術者は私1人でしたので、土木のみならず、水道、建築など何でもやらなきゃならない時代で、以後、平成16年(2004)の函館市との合併による戸井町長退任までの約40年間で戸井町とともに生きてきた。その間、行政マンとして心がけたのは、「これまで主義」の見直しや民間でのスピード感を意識し、建設課長時代には、若い職員とともに「井戸旗クラブ」という勉強会をつくり先進地の研修なども実践、開かれた行政を展開するとともに現場主義を大切にしてきた。

最初に思い出すのは、昭和43年(1968)と48年(1973)に起こった戸井地域での集中豪雨による大災害で、家屋が流され、河川護岸の崩壊などの対応で、函館市や旧亀田町などから応援をいただき、災害復旧事業を完成することが出来たことである。他の自治体の応援はありがたかった。昭和50年(1975)の森町での災害には私が1ヶ月ほど応援に行ったこともあった。その他、治山事業や急傾斜地事業を北海道や国などが実施したことで、今のところ大きな災害もなく推移している。最近の各地で起きている災害を目にする時、行政の大切な仕事のひとつは防災だと改めて思っている。

旧戸井町域の地理は、渡島半島南東部の亀田半島南部に位置し、津軽海峡に面して国道278号線が通じており、大部分は丘陵地で耕地は少なく、漁業が主産業で第二次世界大戦前は天然コンブ、イワシやマグロ漁が盛んだった。イワシの一時保管のために袋間が造られており特異な景観が残っているが、現在は養殖コンブ、マグロ、タコ、イカ、サケ、カレイなどを漁獲しているが、温暖化

の影響で、漁獲量も年々減少している。特に、天然コンブが採れなくなると、養殖コンブの種苗の確保に影響が出てくるので、大変なことになるのではと危惧している。

ご承知の通り、一度も列車が通ることがなかった未完の鉄路、旧戸井線のことについて触れてみる。旧戸井線は、函館本線の五稜郭駅から戸井駅までの29.2kmを結ぶ予定の鉄道路線で、昭和11年(1936)に建設が始まった。軍事物資の輸送もその建設の目的の一つであったが、戦局の悪化や資材不足によって、工事区間が残りわずか2.8kmとなったところで、昭和17年(1942)に工事が中断された。未完の旧戸井線のアーチ橋が汐首地域などに見られ、いわゆる産業遺産として文化財的に認識されている。

町内の汐首岬が北海道一本州間の最短距離となる地点にあたり、本州側地点の大間崎まで17.5kmなので晴天時には視認が可能な距離にある。その距離の近さから、戦前に建設が始まった旧戸井線(未成線)と津軽海峡を経由して大間町との間を鉄道で結ぶ青函トンネル東ルート計画案があったが、実現にいたらなかった。この近距離の地理的な面を生かして、旧戸井町と青森県大間町の間に昭和46年(1971)年にフェリー航路が開設された時期があり、これを契機に、両町は同年に姉妹町の提携を結んだ。当時は、議会、行政、経済団体、特に漁業関係者などは活発に交流があり、有名な戸井マグロの誕生にも影響があったと考えられている。



汐首地域に残る旧戸井線のアーチ橋

函館市と合併する以前の、旧戸井町のイメージキャラクターの「トープスちゃん」は、昭和63年(1988)戸井町開基120周年および、町制施行20周年を記念して誕生したキャラクターで、各種イベントなどにひっぱりだこだった。今はタコの漁獲量は少ないが、当時の戸井地区ではタコ漁が盛んで、この地域にはトープスちゃんの絵がついた下水道のマンホールの蓋や標識、旗などがあった。

旧戸井町の伝説では、全国各地の海にまつわる民話をアニメ化する「海ノ民話のまちプロジェクト」に選定された武井の島伝説がある。武井の島は標高57メートル、周囲720メートルの小さな島で、伝説によれば、ムイ（オオバンヒザラガイ）とアワビが喧嘩をやめないで、海の神様が島の西側はアワビ、東側はムイ（オオバンヒザラガイ）の領域と決めたというお話です。オオバンヒザラガイをアイヌ語でムイというが、ムイに島が似ていることから武井の島になったようで、この民話は海の中にいる生き物に思いをはせるばかりでなく、海の変化を考えるきっかけを与えてくれる話です。

国道278号線にある、戸井の憩いの丘公園の看板から市道を進むと、公園の駐車場があり、そこから徒歩5分ほどのところにある展望台からは、津軽海峡や下北半島を一望することができる。また、旧戸井町は函館市内の湯の川温泉から、15分位の距離にあり、釜谷富士、旧戸井線アーチ橋、北海道～本州最短の地、袋間、トープスビレッジ・ムーイ、武井の島など見所満載の地域です。是非一度、足を運んでは如何でしょうか。

最後に、私が住んでいる高台からの海が見える景観が好きで、また、気性は荒いが気持ちのやさしい漁師の方々も大好きです。これまでの旧戸井町の“海”に関する物語が私の記憶の中では大切ですし、そのことを一番に継承したいものです。



よしざわ よしあき 昭和17年福島町生まれ、昭和36年3月北海道函館工業高校卒業、同年4月鹿島建設に入社、昭和41年8月戸井町に奉職、平成14年3月戸井町長に就任、平成16年12月函館市との合併により戸井町長退任とともに函館市参与（戸井支所長）就任、平成19年3月退任

思い出深い恵山の人々と埋蔵文化財

館 和 夫



地元のタブーと懐かしい2人の古老

私は昭和36年(1961)の春から2年間ほど、下海岸の旧尻岸内村（現在の函館市日ノ浜町）に住んでいた。まだ24、5歳の駆け出しの頃で、渡島支庁（現在の渡島総合振興局）林務課に属する出先機関の職員として、役場のご厄介になっていたのである。事務所の主な仕事としては、毎年春先に造林地の検査をして補助金を出すための造林検査のほか、森林被害調査、森林統計調査、造林技術指導、キノコや特用樹の栽培指導、林家の経営計画その他の林業相談に応じることなどであった。

赴任後早々、役場の前の漁家に下宿を定めた後、何となく村内を探訪したくなって海岸道路を東の方に向かっ

て歩きだし古武井港を過ぎ、温泉への登り口を過ぎ、やがて海面から直にそそりたつ標高618mの恵山の雄姿をふり仰いだとき、何やら名状しがたい感動に打たれたことを、60数年を経た今も、かすかに覚えている。

それからまもなく開かれた役場の歓送迎会の席上だったと思うが、私は図らずもある中年の職員からこの地にやってきた者が、必ず心得ておかなければならないタブー、といった事柄についての話をきかされた。

タブーの第一は、海岸に並んだ漁家の前に敷き詰められた玉砂利を、決して土足で踏んではならないということである。この地の主産物の一つである昆布の干場という神聖な場所であるからには、当然のマナーである。また、そのことからして容易に推察されたのは、趣味程度の磯釣りは別として、地元にとって大切な昆布、わかめ、

ウニ、貝類などの漁獲物、いわゆる磯物については、許可を得た者でなければ決して採ってはならない、ということであった。

その次に職員が、地元の若者たちの気風の紹介というかたちをとって教えてくれたのが第二のタブーである。すなわち、外来者が村の娘と交際する場合の絶対条件ともいべきもので、彼の口ぶりを借りると、「一緒になるんだバいいども、その気もないくせに娘バ騙したりしたら、簀巻きにして海サ放り込まれっからナ」という、いささか乱暴な脅し文句？である。

もともと風采が上がらず、女性にもてるはずがないと割り切っていた当時の私にとっては余計な忠告と思われたが、この種のトラブルを未然に防がなければならない年長者の配慮と思えば腹も立たない。したがってその時の私は何の抵抗感もなく、黙ってうなずきながらその話を聞いているばかりであった。

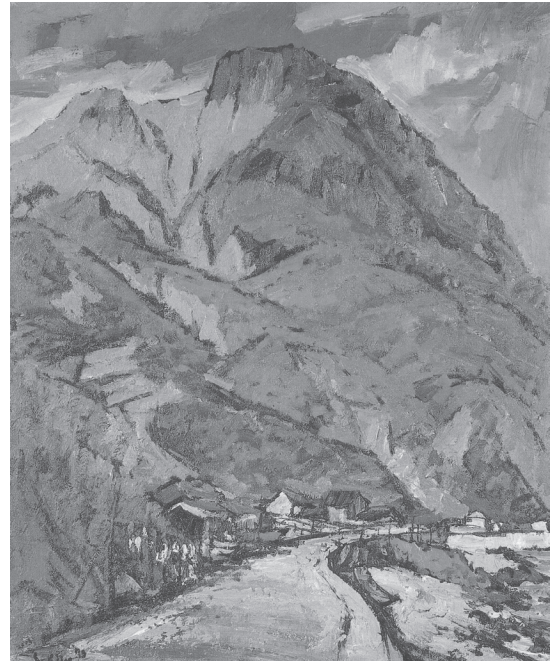
その後まもなく、職場には新しいオートバイが配備され道の水産指導員や、村の林務係員といった、同様の職責を持つ仲間たちとの親睦も深まって、私は恵まれた職場環境に感謝しながら日々の務めを果たしていった。そのように職場の人間関係は上々だったが、日々に接する下海岸の大自然の方は必ずしもそうはいかない。

渡島半島の南東部に当たる亀田半島の一帯は、もともと表裏とも前面に開けた広い海と短い川を持ち、谷密度は高く平野部は少なく、人里と山林間の境界域は狭いという特徴を持つ土地柄である。

熊などの危険動物と遭遇する機会もまれではない。仕事柄、山奥での単独行動を余儀なくされることも多かった私であるが、そのような場合、しばしば助けられたのは近所に住んでいた佐藤勘藏という名の老人による様々なかたちの協力であった。若いころに軍歴があったらしい彼は、体が丈夫で地元の山については知らないことがないほどであった。

そのようなわけで気の合った佐藤老人とは、ずいぶん足しげく村内の山路をともに歩いたものである。

巡視の際、尻岸内川をさかのぼった上流の谷間で、珍しい白花タニウツギを見つけたこともあれば、古武井川の小沢の奥で浅い地面の下から小振りな水晶の塊を掘りあてたこともある。また、コメツツジなど、後に北海道林務部編纂の樹木図鑑に載ることになった数枚の貴重な



恵山の秋 1973 (昭和48) 木村捷司 (1905—1991)

樹木写真を撮ることもできた。佐藤老人との忘れられない懐かしい思い出は、今も私の脳裏にぎっしりと詰まっている。

独居老人との付き合いは佐藤さんばかりではなかった。日ノ浜の海岸道路が古武井に向かう道と、楳法華に行く道とに分かれる辺りに、その頃、地元におけるアイヌ民族系の最後の一人と目される老人が住んでいた。いま仮にその名をAさんとしておこう。

Aさんはいつも一人で山に入り、ハクサンシャクナゲの枝をたくさん採ってきては、握りの部分を使いやすいようにうまく切り取って削り、先の方にキャップの金具をつけて土産用の杖として売っていた。また、細い竹を丁寧に細工して川釣り用の竿に仕上げ、売ったりもしていた。私がたまにそれらのものを買いに行くと、喜んで、いろいろなことを親切に教えてくれたものである。晩年はもう食事の支度もできなくなり、もっぱら近所の食堂のお世話になっていたようであるが、その後、道路の拡張工事があって老人の古びた住居はいつしか姿を消し、その消息もわからなくなってしまった。

交際には幾分、濃淡の差こそあったものの、私にとって大切だった彼ら独居老人との交際は、いずれもはや60数年前の遠い昔話になってしまった。かつての老人たちのその面影も行跡も、今ははや地元の人々の記憶の中にもほとんど残っていないであろう。

しかし、私が万事未熟だったあの頃、それぞれの胸に深い孤独を抱えながらも、日頃からいろいろと親切にしてくださった兩人への感謝の気持ちは、私の念頭から消え去ることはない。

「逃がした魚は大きい」埋蔵文化財

私が日ノ浜の小さな借家で母と弟と共に暮らしていたその頃は、地域の浜砂鉄や山砂鉄の採鉱の真っ盛りで、日ノ浜周辺の高岱や女那川寄りの浜から大量の砂鉄が、急造された女那川栈橋を使って本州方面に続々と出荷されていた時期である。採鉱に当たった東北ブルという会社の堀さんという名の運転士の家が隣にあって、堀夫と母とは日頃から親しく交際していた。堀家の土間には、大中小三つ重ねの盃状の土器などが無造作に置いてあり、大して大切にされているようでもなかった。当時、もう少し私にその方面についての関心があれば、頼みようによってはそれらの内の一つや二つは貰えたかもしれない。そう思うと悔しいが、所詮、「後悔、先に立たず」である。

昭和50年(1975)、南茅部町著保内野遺跡から土偶（通称かっくう）が発掘され、北海道唯一の国宝に指定された結果、北海道南部の埋蔵文化財に関する人気は空前の盛り上がりを見せ、現在は世界遺産への指定を目指して、東北各地の考古学関係者とタイアップした運動が盛んにおこなわれていることは周知のとおりである。しか

し、昭和30年代半ばの当時、道南地方における考古学上の遺跡は、それほど注目される存在ではなかった。それ故、砂鉄の採取などで恵山地方の里山の表土が大規模に剥離されていたその当時、少なくとも下海岸の日ノ浜周辺は、は、埋蔵文化財の収集につき千載一遇の機会に恵まれた地域であったといえる。別に埋蔵文化財の金銭的価値に拘泥するわけではないが、本来収まるところに収まるべき地域の宝である文化財の一部が私の無知と無関心のゆえに散逸してしまった悔しさが、折に触れ私の胸を駆けめぐる。

手元にある道内各地の縄文文化に関するパンフレットなどを見るにつけ、3,000年前の亀田半島住人である「かっくう」大先輩から、「失ったものは戻らない、忘れなさい。残ったものを大切に生きて下さい。喝！」と、活を入れられたような気がして、久しく使わなかったパソコンに向かい、恵山付近における若き日の私の思い出の一端を記してみた。当時における恵山地方の住民気質や土地の雰囲気のようなものを、少しでも感じとっていただければ幸いである。



たて かずお 昭和12年厚沢部町生まれ。江差高校、宇都宮大学農学部卒。北海道立林業試験場、北海道林務部森林整備課などに勤務し、平成9年定年退職。現在江差追分相談役。著書に「道南の人・唄・風土」など。函館市在住。

恵山の“つつじ”

松 本 光 隆



現在の恵山地域に和人が移住したのは、恵山町史によれば、享保5年(1720)とされている。その後、徐々に移住者が増え、箱館六ヶ場所を経て村並になり、

安政5年(1858)に村となり、昭和39年(1964)には人口が1万人を超え、尻岸内村から尻岸内町となった。昭和59年(1984)、渡島支庁の仲介による樞法華村との境界確定と尻岸内町が恵山町と名乗ることの同意についての調印を経て、昭和60年(1985)に町名を恵山町に変更、平成16

年(2004)に戸井町、樞法華村、南茅部町とともに函館市に合併した。

「恵山」と言っても多くの方が思い浮かぶもの。それは今も噴気を上げる活火山恵山と、春に真っ赤な花を咲かせる“つつじ”ではないでしょうか。今回は、そのつつじに関するエピソードをご紹介します。

恵山のつつじは、活火山恵山の影響による酸性土壌等により昔から自生しており、恵山つつじ公園に咲くつつじも植樹したものではなくともと自生しているもので、昭和初期の新聞記事によれば、当時からつつじの名所と

して知られており、函館の名士の方が花見に訪れる場所となっていた。

今の恵山つつじ公園は昔から自生している場所を公園として昭和55年頃（1980頃）に整備したものだが、整備はされたものの、つつじの木の剪定は行っていないため、自生していた当時から成長した姿を今も見ることができる。

恵山つつじまつりは昭和43年（1968）から、町の一大イベントとして町観光協会の主催で始まり、HBCラジオの公開録音などで著名な芸能人も来ており、また、毎年キャラバン隊を組織して、札幌などの道内の他、東北方面などへPRのため出かけていた。

そのおかげもあり、つつじまつり期間中（17日間）には3万人を超える多くの観光客が恵山に来て賑わいをみせていた。

さて、私が恵山町役場に就職した昭和59年（1984）当時は、通信手段はまだ電話だけでファクシミリではなく、事務作業はワープロなどもなくもっぱら手書きの時代だった。つつじまつりの時期が近づくと、つつじの開花時期などに関する観光の問い合わせ電話がひっきりなしに鳴り、総務課の職員が電話の対応をしていたが、電話を置いた瞬間に次の電話が鳴りまた電話対応するということを繰り返し、仕事ができない状況だった。当然ながら、電話の問い合わせには、つつじの見頃時期に関することが多く、当時は電話に出た職員の主観により、まちまちの見頃時期を伝えていたため、来訪した観光客から「情報が違った」など、苦情の電話がかかってくるということもしばしばであった。

森町などではファクシミリにより桜の開花情報を提供する仕組みが導入されていたが、恵山町では残念ながら電話対応だけだった。それでも開花予想日などは町職員で統一見解を共有して、情報の提供をすることに改められていた。

平成に入り、パソコンの導入やインターネットの時代を迎え、恵山町でもホームページが開設されると、ホームページ上でつつじの開花に関する情報を提供出来るようになった。

平成16年（2004）の合併以後も、つつじの開花情報はホームページで情報更新がなされ、函館市のホームペー

ジ内の、恵山のつつじ開花情報がアクセス数は常に上位に位置していた。

しかし、何か月も前から開花や見頃の情報を発信するまでには至らず、観光客からの問い合わせは以前と変わらず電話が主流で職員が対応に追われる状況は変わらない。そこで今まで職員の主観や地元の方の意見を参考にした曖昧な予想から、事実に基づく開花予想へと切り替える取り組みを始めた。

恵山つつじ公園には、毎年先行して開花する木があり、この木を開花基準木として、この木が満開になった日を基準につつじの開花や見頃の予想ができないか平成20年（2008）から記録を残し、取り組みの最初として、開花日やつつじ公園全体が五分咲き以上の見頃になった日、満開になった日、散り始めの見頃終わりの日を記録する『見える化』に取り組んだ。

『見える化』の取り組みを始めて5年ほど経った頃、開花や見頃の予想を事前にできないか試行錯誤が始まった。最初は、五稜郭公園の桜の開花時期と満開時期と比較して、つつじ公園は何日後になるかという調査を行ったが、毎年、桜の開花予想は1月頃から各気象情報会社から提供されるので、これらの情報からつつじの開花時期を予想ができるようになった。最初の頃の平均値は「桜の開花から21～23日後につつじが開花する」「桜の満開から23日～25日後につつじが満開となる」という予想で、例えば、桜の開花が4月26日ならつつじは5月17日頃に開花すると予想ができるようになった。

しかし、地球温暖化の影響なのか、桜の開花後に気温の高い日が続いたりして、徐々にこの平均値が当てはまらなくなってきた。



恵山つつじ公園

そこで、桜と同様に気温の積算で開花予想ができないかと、気象庁のホームページから函館と室蘭の毎日の最高気温と最低気温のデータをダウンロードして手がかりを探した。

開花日等の『見える化』記録はエクセルのファイルに10年分を蓄積できていたので、あとは条件をそろえて比較することで明らかになると考えた。その結果、開花日については、前年の開花日翌日から当年の開花日まで、最高気温から最低気温を差し引いた値の累計が函館で2,900℃、室蘭で2,100℃の条件を越えると開花するという近似値を得た。見頃は開花日から4日後頃、満開は7日後頃という平均値をあてはめることで、開花と満開の予想ができるようになった。

この条件をもとに開花予想を事前にホームページに公

開することで、旅行代理店や観光客からの電話による問い合わせ件数が大幅に減ったことは大きな成果だった。

『見える化』で地球温暖化の影響は明らかで、過去には5月末頃が満開時期だったものが、近年では5月23日頃、令和6年(2024)は最も早く5月15日頃となった。ちなみに、令和7年(2025)の開花日は5月14日、見頃は5月17日から、満開日は5月21日から25日だった。

さて、来年令和8年の開花日や満開等は何日頃になるだろうか。『見える化』継続のため恵山つつじ公園に通う日は、これからも続く。



まつもと みつたか 昭和40年函館市(旧尻岸内町)生まれ、当初は業務外のつつじ開花について情報を整理した。令和5年度末で函館市役所を早期退職。

地域性を生かした実践



朝日が昇るのを確認しながら、海側の国道を通ると潮騒と潮の香が漂い、山側の道道を通ると四季折々に織りなす多彩な色使いの景色に目を奪われそうにな

りながらの通勤はとても楽しい毎日だった。

私の勤務校は、1世紀以上に亘り輝かしい伝統と歴史を築き上げてきた日浦小学校、尻岸内小学校、古武井小学校、恵山小学校が統合し、平成16年(2004)に開校した新生「えさん小学校」。「ふるさと恵山」を受け継ぐことになった学び舎での実践をご紹介します。その魅力をお伝えできればと思う。

恵山地区とは

恵山地区は津軽海峡に臨む漁業の町であり、寒暖両流が交錯し豊富な漁業資源をもっている。漁業態様が幅広く、沿岸の昆布操業や沖合でのイカ漁、冬期のタラ漁があるほか、最近では「海峡根ばっけバキバキ」や「ごっこ(ホテイウオ)」、海藻類では昆布が「黒口浜コンブ」として品質が高く評価されている。

～恵山地区でのとりくみ～

山 田 肇

また、シンボルである活火山「恵山」は太古の噴火活動で形成された。今から4～5万年前に海向山、楸山が誕生したのを契機に、2万～2万5千年前の間に外輪山、8千～1万年前に恵山溶岩ドームができたとされ、それらが複合した活火山である。明治7年(1874)6月に小噴火して以降は小康状態にあるものの、今もなお噴気を上げ続ける姿に大地の鼓動を感じ取れる。

「総合的な学習」の実践

「総合的な学習の時間」は、変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標とし、平成12年(2000)に創設された。この学習は各校・教員で工夫を凝らし児童の主体的な活動を促し、学びを深めるため、「恵山」を学ぶ絶好の機会となる学習である。

アイヌ語地名から地形や地域の特徴を捉える授業

学習開始当初、児童はアイヌについての知識が皆無だったが、学習をすすめる中で身近なものとして捉え、

アイヌの文化・歴史について学びを深めていった。高学年においては、「古武井」の語源（コンブモイ＝昆布の多い湾）を確認した上で、北海道釧路町「昆布森」も地名の由来が同様であること、北海道には地形などの特徴から類似した地名があること、海岸線を中心に同類の言葉をまとめることで、この地域の特徴を調べる活動に繋げることができた。

【恵山地区内にある主な地区名】

※各地名については諸説あり

・日浦（ひうら）	→ ヒララ（蛇が多くいるところ）を語源
・古武井（こぶい）	→ コンブモイ（昆布の多い湾）を語源
・恵山（えさん）	→ イエサン（半島の端にある＝岬、浮石＝軽石）
・女那川（めながわ）	→ 川の支流（メナベツ）。倭人がそれに「川」をつけた地名
・大澗（おおま）	→ 川尻の澗＝良港

火山である「恵山」を多面的に捉える学習

児童は火山であることは理解していますが、その危険性についての認識はない。そこで防災意識を高めるとともに、その恩恵・歴史もしっかりと認識するため、噴火の実験を行い、噴火の仕組み・それによって生じる副産物・歴史について学んだ。

【実験の手順】

- ①まずはマグネシウム（粉末）と酸化鉄（粉末）をすり鉢ですり混ぜる。



今も噴煙の上がる恵山

- ②ろ紙をぬらし、火山模型（20cm四方・自作）にセットする。

- ③その中に①を入れ、切ったマグネシウムテープを差し込む。

- ④マグネシウムテープに点火、発火・噴火の様子を観察する。

【実験結果】

○噴火物（鉄粉）が2メートル以上散らばる。

○点火すると50センチメートル程度の火柱がたつ。

○マグマがアルミ板の「溝ぞい」に流れる。

噴出物から恵山周辺の地質についての学習

火山の主な噴出物は、「溶岩・火山弾・火山灰・火山ガス」の4つで、実験を通して、溶岩が地形に沿って流出するとともに、噴出物を確認できた。

児童は、火山模型の下に敷いた画用紙が広範囲で燃えるのを見て、広範囲に噴出すること、火災を起こす可能性があることを確認した。児童から開口一番に出た言葉は、「先生、恵山が噴火したらどこまで降るの？」だった。20センチ四方の実験道具から想像を超えて拡散する噴出物に驚愕し出た言葉で、実験終了後に冷えた溶岩に磁石を近づけると付着するから噴出物に「鉄」が含有していることも理解した。

実は、道の駅「なとわえさん」のあたりは砂鉄を含んだ隆起砂丘となっている。噴出物には「軽石」もあったことから、「軽石＝浮石」が恵山の語源の一説（イエサン＝軽石）であることを調べたり、「軽石の中にも鉄は入っているのでは？」と自ら磁石の付着実験を行ったりと主体的に活動した姿が印象的だった。

今から60年ほど前には、「日鉄鉱業株式会社」という鉱物採掘会社が海底から砂鉄採掘をしていた時代があったこと、さらに江戸時代から多くの砂鉄が取れたことから、古武井地区には溶鉄所があったことも子どもたちとともに地域の歴史についても学ぶことが出来た。



やまだ はじめ 昭和45年函館市生まれ。北海道教育大学函館分校卒業。函館市立亀田小学校を皮切り（初任地）に、松前町立小島小学校、函館市立北日吉小学校、北昭和小学校をへて、えさん小学校に5年勤務。現在、函館市立赤川小学校勤務

唐渡法華精神(スピリッツ)の再現を

川 口 英 孝



楸法華からは縄文早期の「尖底土器」が出土し、現在北海道指定文化財として登録され、函館市立博物館に保存されている。

その紋様は竹管による押し引き沈線文で、その後の土器の流水文の原形をなしている。尾形光琳の作品にも用いられ、すべての流水文の文様はこの縄文早期から始まったと言われている。

楸法華は明治9年(1876)に旧南茅部町尾札部村から一村独立をしている。当時の人口は500人程度と推定されている。その尾札部から近年縄文後期(3,500年前)の中空土偶が出土、国宝に指定され、また、この一帯は世界文化遺産とし登録されている。はるか縄文時代、東北地方と北海道は盛んに交流されていた。下北半島と渡島半島の最短距離は約18kmで、青森県下北半島からは霊峰恵山(618m)が噴煙を上げ、北の大地の目印として存在し、天気の良い日には互いに舟を出し、交流していたことが想像できる。恵山の麓の楸法華の地は、縄文人が早くから定住していたが、現在は地球温暖化が進み、気候変動は地球そのものの生態を壊し始めている。縄文時代は「自然との共生」により、争いもない平和な世界が存在していたと言われており、地球環境が悪化する現在、自然との共生を図り持続可能な地球を考え求めることに、縄文遺産群の土地として、語り知れぬ意義を感じている。それらを世界に示すための価値を、私たち地域が受け持つという重大な使命を感じなければならない。

楸法華という一風変わった地名だが、遠く鎌倉時代、にちれんだいしやうにん こうてい れんげ あじやりにちじ日蓮大聖人の高弟である蓮華阿闍梨日持と申す僧がこの地を訪れ、日本初の海外布教を目指し唐の国に舟出したという伝説がある。舟出の際村人に世話になったということで、見たこともない美しい魚を大漁させたという。法華の上人にちなみ「鰺=ホッケ」と名付けた。唐に渡った法華の上人が「唐渡法華」と名付けたのは、上人が舟出した永仁7年(1299年)6月のことである。さらにこの地にある水無海浜露天風呂は、日持上人が疲れた身体を癒したといわれている。

そんな挑戦心あふれる地名のとおり、村人のまちづくりにかける意欲はそれ以後めざましいものがある。明治40年代頃はすでに木簡水道事業を起こし、水の管理による公衆衛生状態の確保を目指している。大正9年(1920)には楸法華水力発電事業を開始し、その電球の明かりを一目見ようと近在から来村する人たちもあったという。終戦間際の昭和20年(1945)7月15日には、恵山岬灯台の近くに軍の監視所があったため、米軍の空襲を受け4名の死者が出るという悲しい出来事もある。さらに昭和20年代後半頃、当時の小学校校長は教え子が横綱となった事を機に、小学校のグラウンドに土俵を造り、横綱千代の山(福島町出身)の土俵入りを披露し、近隣から大勢の人々を集め、戦後の退廃したムードを払拭したということもあった。

昭和59年(1984)には、人口も戦後30年代の4,000人から半減した。漁業の不漁と少子高齢化による地域の活性化が見られなくなり、その時、村の若者が漁業にとってはデメリットな大波の立つ岬を利用し、サーフィン大会を企画した。当時、北海道ではサーフィンは馴染みがなかったが、若者たちの発想は話題性を呼び、開催当日には村の人口の2倍を超す5,500名が来村した。以後、楸法華銚子サーフビーチは北海道サーフィンのメッカとなり、今や全国からサーファーが訪れるまでになった。そんな楸法華だが北海道新幹線開通時に道南の経済効果を期待する講演会が開催され、その席上ある講師から新幹線が開通して発展するまちは「鹿部町と楸法華村」との



サーフィンのメッカ銚子サーフビーチ

発表があった。全国各地の自治体を訪れたというその講師に発表の真意を尋ねると、ネーミング自体が面白いと語ったのである。楳法華の歴史や先人たちのまちづくりの意欲に期待したに違いない。

その楳法華は平成16年(2004)に近隣一村三町と函館市に合併された。それまでの一村三町は行政間の交流もなく、別々の地域であった。合併の主たる理由は地方交付税の大幅な削減が提示されたことから、一気に合併へと走ったため、交流がなかった住民は未だに広域合併の意義を見いだせないでいる。しかし、最近では函館市東海岸としての地域の活性化に向けた取り組みが始まり、楳法華では恵山岬灯台を活用した若者たちのイベントが開催されている。半島先端に立ち、航海の安全を願う機能から、灯台の景観の良さを見直し、新たな灯台の優位性に着目してのイベントは、恵山岬灯台の素晴らしい景観と銚子岬サーフビーチの景観の優位性は、楳法華の魅力となっていくに違いない。

しかし残念なことがある。令和7年(2025)4月をもって、古武井(旧恵山町)と楳法華間のバス路線が人口減により採算ベースにのらず廃止となった。この区間は明治8年(1875)に古武井と楳法華の人夫計130人の奉仕活動で開設されたもので、その時楳法華小学校で行われた

開通式の様子は「文明開化」が始まったという喜びにあふれていた。人口減と過疎化により、近年鉄道の廃止が各地で急激に進んでおり、バスも同様に公共交通機関の廃止は、地域社会の存続に及ぼす影響は計り知れないものがある。公共交通機関の維持管理は、新たな地域づくりの課題として地域住民に投げかけられている。

はるか縄文早期(1万2千年前)から楳法華の地には人が住み着き「自然との共生」を大切に生きてきた。その後の我が先人たちの地域発展にかけた努力を今一度思い起こし、さらなる未来の楳法華の存続に生かそうではないか。

人口は一村独立を果たした明治9年(1876)の人口約500人に限りなく近づき、現在約700人となった。公共交通機関の廃止により、楳法華は限りなく明治時代に近づいてきている。縄文早期からの自然との共生。鎌倉時代に法華宗の僧がこの地より唐の国に渡ったという故事にちなみ、唐渡法華精神(スピリッツ)の再現を期待したい。



かわぐち ひでたか 昭和23年函館市(旧楳法華村)生まれ、昭和46年拓殖大学中退。元北海道地域おこしアドバイザー、現在は楳法華地区町会連合会会長を歴任。飲食店経営。

コンブ養殖漁業を成功へと導いた先人の歴史



平成16年12月の市町村合併における「旧4町村」がテーマということで、旧南茅部町出身の私は、日本の食文化を支え、繊細な味わいを生み出す真昆布、

特に生産量の飛躍的な増加に繋がったコンブ養殖漁業を成功へと導いた先人の歴史を振り返ってみたい。

旧南茅部町は、日本一の品質を誇る「白口浜真昆布」と「北海道大謀網発祥の地」であり、多くの貴重な遺跡が発掘されていることで知られている漁業の町である。

天然コンブは、元来、収穫まで2年間を要する生態か

芝 井 穰

ら「隔年豊凶」の宿命にあった。昭和40年代始め、水産庁北海道区水産研究所増殖部長であった長谷川由雄博士により開発された促成栽培養殖技術は、製品化までの期間を2年から1年に短縮できる画期的な養殖法であり、現在も南茅部地域の主要漁業として、漁家経営の安定と地域産業の振興に大きな貢献を果たしている。

天然コンブが主力漁業であった時代

昭和30年～40年代の南茅部町では、漁場背後の急峻な地形から台風などによる被害(時化・土砂流出等)も度重なり、天然コンブ漁だけで生計を維持することが難しくなった多くの漁業者は、安定した収入を求めて出稼ぎ

へと流れ、漁業の町に黄信号が灯り始めた。

正月を過ぎると千人以上の漁業者が毎年出稼ぎで海を渡り、その多くはコンブ漁に間に合うよう6月までの半年間を季節労働者としての就労が続いた。

当時、天然コンブが主力漁業であった漁業者は、資源の動向に左右される不安定な漁家経営から脱却し、一年を通して家族とともに暮らすことのできる安定した漁業の実現を切望していた。

天然コンブ増殖事業への取り組み

昭和28年頃から、国による沿岸漁業振興が始まり、北海道はコンブの増殖事業に関する調査と指導を重点的に取り組むこととなった。

当時、水産庁北海道区水産研究所の長谷川博士をはじめとする研究スタッフは、これまでの研究からコンブの幼体時における成長過程を解明することが天然コンブの増産に繋がるとの考察から室内実験に重点を置き、種を交配し、その種苗を用いたコンブの育成に挑戦したが、実験は困難の連続だったそうだ。



コンブ養殖漁業の道を拓いた
長谷川由雄博士

試行錯誤の末、長谷川博士は、コンブが成熟しない原因は種苗を育てる培養液にあることに気づき、当時、最先端技術とされたアメリカのプロバゾリ博士が開発した「微量金属を加えた人工海水」も試したが、残念ながら期待した効果が得られなかった。

その後も各種成分の調整を繰り返しても決め手を掴めず、半ば諦めかけていた時「コンブに多く含まれているヨードの添加はどうか」との研究スタッフの視点が成熟可能な種苗培養を成功へと導き、天然コンブ増産への期待が高まった。

コンブ養殖漁業への挑戦

こうした研究成果を耳にした北海道開発局から、この種苗（幼体）を用いてコンブの養殖ができないかとの提案を受けた長谷川博士は、当時養殖試験地として最適

と考えられた南茅部町及び川汲漁協へ打診、「コンブを養殖するなど夢の話」と半信半疑だった漁業者を説得、「前浜のコンブの種を使うこと」を条件に了承され、川汲漁協の協力も得られたことで現地試験実現への役者が揃うこととなった。

北海道開発局は総括、北海道区水産研究所は技術的協力と種苗生産、南茅部町と川汲漁協、北海道水産技術普及指導所が海上での養成管理と製品化について分担したプロジェクトチームを結成、昭和41年より4力年計画でこの試験事業が開始された。

翌年には、見事に生育したコンブが水揚げされ、天然物に見劣りしないと漁業者から評価を受けることとなり、昭和44年には、養殖コンブが初めて市場に出荷、その品質が多くの市場関係者に認められ、天然物の約7割の価格で取引引きされたことから、コンブ養殖事業の企業化への道が拓かれることとなった。

長谷川博士は、「研究者は常に現場に足を運び、浜の声を聞き、見るのが大事だ。そこには机上にない貴重な教えがある」「どんな素晴らしい技術でも生産現場に貢献する技術でなければ意味がない」との強い信念をもち、ついに今まで誰も果たすことのできなかった促成栽培技術（製品化までの養殖期間を2年から1年に短縮する養殖法）を確立させ、ここに安定した栽培漁業としてのコンブ養殖漁業が誕生することとなった。

獲る漁業から育てる漁業への転換

当初、「養殖コンブは、隔年豊凶が宿命の天然コンブを補完するもの」と考えられていたが、着業者の急速な増加により昭和50年にはその立場が逆転して以来、南茅部地域の漁業別生産のトップとなっている。

獲る漁業から育てる漁業への転換の原動力となったこの養殖技術は、南茅部地域に止まらず、その後、道南から北海道全域、本州太平洋沿岸各地に急速に普及し、コンブ生産量を飛躍的に増加させ、加工原料の安定供給にも大きく寄与することとなった。

コンブ養殖漁業を成功へと導いた先人の歴史を振り返り、その原点となる心を次世代の漁業者に継承しようとしたこの取り組みは、真に意義深いものがあり、このプロジェクトに携わった関係者の熱意に深く敬意を表するものである。

今後の課題

一方、技術開発から半世紀以上を経過した今日、度々発生する病害や近年の高水温・潮流変化への対応、育てる側の意識のもち方、漁業者の高齢化や減少など、課題も多く挙げられている。

今後も、この技術開発に対する先人への感謝の心を忘れることなく、海洋環境の変化に敏感なコンブづくりに

加え、日本の食文化を守るため、私も市内の漁協や漁業者とともにしっかり取り組んでいきたいと考えている。



しばい みのもる 昭和35年函館（旧南茅部町）生まれ。昭和54年函館有斗高校卒業、同年南茅部町役場に採用され、南茅部町総務課、水産課に勤務、合併後函館市農林水産部次長、港湾空港部次長、榎法華支所長を歴任し、令和3年定年退職、その後、令和5年函館市議会議員に当選1期目

誰もが楽しめる施設を目指して ～函館市縄文文化交流センター～

函館市縄文文化交流センター館長 **佐藤 安浩**



はじめに

令和5年3月から、函館市縄文文化交流センター館長を務めているが、実はこの役割は今回が2度目になる。最初に携わったのは平成27年、函館市の職員として1年間、この施設の運営に関わり、今回は指定管理者の立場として戻ってきた。同じ施設でも立場が変わると見える景色や意識する視点が変わるもので、学芸職員としてではなく館全体を支える立場として現場に立つ今、以前とは異なる思いと責任感を胸に、日々の運営に取り組んでいる。

館長としての役割と責任

私は学芸員ではないので、国宝や重要文化財などの資料に直接触れることや、解説などの専門的業務は、当館の学芸職員に任せており、その代わり、施設運営全体がスムーズに機能するよう、縁の下から支える役割を担っている。具体的には、来館者の安全を第一に考えた安全管理体制の整備、イベント企画・準備やスタッフ配置、運営に係る予算管理、施設設備の保守点検など、多岐にわたる業務を統括している。こうした業務は目立たないが、「利用される方が快適に過ごせる場」を支えるために、非常に大切な仕事と思っている。

誰もが楽しめる場を目指して

当センターには、北海道内はもちろん、全国各地、さらには海外からも多くのお客様が訪れている。観光の方、

学校の授業や修学旅行で訪れる児童・生徒・学生、市民の方や町会活動の一環などで幅広い層にご利用いただいております。どなたにも縄文文化を楽しみながら理解していただけるよう、様々な工夫を凝らしている。たとえば、事前予約による館内解説は無料で実施をし、多くの方から「解説を聞くことで縄文文化が身近に感じられた」、「展示を深く理解できた」といった喜びの声をいただいている。また、館内説明表示を英語・中国語・韓国語など多言語に対応させることで、海外のお客様にも配慮し、誰でも見やすく分かりやすい案内を心掛けている。こうした“快適に過ごせる環境づくり”は、展示を楽しんでいただく第一歩だと考えている。

見学だけではなく体験で楽しむ

展示を見るだけでなく、実際に「作ってみる」「体験してみる」ことで、縄文文化をより身近に感じることが出来る。当センターでは、勾玉（まがたま）づくり、組ひもアクセサリづくり、カックウ（土偶）の顔づくりなど、世代を問わず楽しめる体験メニューを用意してお



カックウのアクリルスタンド

り、子どもから大人まで真剣に取り組んで、完成した作品を手にした時には笑顔があふれていた。また、月に一度のペースで開催している体験講座には、市内外から多くの方が参加され、最近ではリピーターの方の参加も多く見られるようになってきた。私も時々見学することがあるが、参加者の熱心で楽しそうな姿には、見ていてもうれしくなってくる。こうした体験を通じて、単なる展示の鑑賞以上の価値を提供できていると感じている。

国宝「中空土偶」発見50年～節目の年に～

今年2025年は、当センターが所蔵している国宝「中空土偶」が、農作業をしていた地元の主婦によって、偶然発見されてからちょうど50年の節目の年にあたる。

「南茅部の中空土偶」ということから「茅空（カックウ）」の愛称で呼ばれているが、発見以来、「カックウ」は北海道の縄文文化を象徴する重要な文化財として地域とともに歩んできた。この節目の年を迎えるにあたり、再び館長としてこの場に立てたことに身の引き締まる思いである。文化財としての価値だけでなく、地域の誇りとして受け継がれてきた「カックウ」を、大切に守り、次の世代にも伝えていかなければならないと決意を新たにしている。

今年は、土偶発見50年記念企画展をはじめ、特別体験講座や関連イベントを多数ご用意し、多くの方に土偶の魅力を直に感じていただきたいと思います。また、ミュージアムショップでは、記念グッズを多数取り揃えて、特に土偶の亚克力スタンドは好評をいただいている。展示・体験・グッズ、それぞれに“記念”の色を添え、この特別な年を来館される皆さまとともに楽しんでいきたいと思っている。

世界遺産構成資産としての連携

令和3年（2021）7月27日、北海道・北東北の縄文遺跡群がユネスコ世界文化遺産に登録された。函館市では「史跡垣ノ島遺跡」と「史跡大船遺跡」の2つの遺跡が世界遺産の構成資産として含まれている。当センターは、垣ノ島遺跡に隣接し、大船遺跡へは車で約10分と恵まれた立地にあり、どちらの遺跡にも解説員を配置し、定時解説を実施している。また、垣ノ島では実際の土器を利用した発掘体験も行っていて、体験された方からは「発掘の雰囲気味わえてよかった」と非常に好評をいただき、展示や体験に加えて現地でのリアルな体験を通じて、縄文文化への理解と関心をさらに深めていただければと考えている。

今後に向けて

館長としての役割は、派手な業務ではないかもしれないが、施設を支え、利用者やスタッフが気持ちよく過ごせる環境を整えることだと思っている。これからも地域の方々や関係者と手を携えながら、縄文文化がより多くの人に親しまれ、深く理解される場づくりに努めてまいりたい。土偶発見50年という記念すべき年を契機として、「この場所だからできること」、「文化を伝える責任」をあらためて感じ、一步一步着実に歩んでいきたいと思っている。



さとう やすひろ 昭和37年上磯町（現北斗市）生まれ、函館市内の高校卒業後、函館市役所に奉職し、文化財課長、函館市縄文文化交流センター館長などを歴任。令和4年函館市役所を退職し、令和5年3月より現職。

平成の大合併における「歴史と文化の継承」とは

根本直樹



今回の会報「巴響」テーマは“旧4町村”。このテーマを決める要因として平成の大合併から20年が経過したことが関連している。そこで大合併がどのよ

うな契機で行われたのか、住民がどのように捉えていたのかなど当時と20年後の検証記事などから追ってみることにした。

平成16年12月1日の北海道新聞（以降「道新」）の夕刊一面には、「30万“海洋都市”へ新・函館市船出」との

見出しがあった。その記事には、「新・函館市が直面する最大の課題は財政再建と市域全体の「均衡ある発展」だ。合併で旧四町村の財政危機は救済されたが、国と地方財政の「三位一体改革」で地方への逆風は強まり、新市でも徹底した行財政改革が不可欠だ。過疎化の深刻な旧四町村地域にも目配りした地方振興策も求められる」と解説されている。つまり合併が必要とされたのは4町村の財政危機にあったことが理解できる。

より具体的な経緯は、その日の朝刊に「門出には期待と不安がつきものだ。きょう誕生する新・函館市には「道南の一体的発展」という期待と「函館に編入される四町村が寂れるのでは」という不安がある。期待より、不安が大きい気がする。理由は二つある。一つは「平成の大合併」がもたらす、やり切れなさにある。国から地方に回る金は減りいずれマチの予算が組めなくなる。合併で豊かになる保証はないが、選択肢は合併しかないという現実だ。もう一つは、周りの自治体から「面倒見の悪い兄貴分」と評されがちな函館市が、四町村地域の面倒をどこまで見るかという心配だ」と報道部長が論説している。

これらの町村合併がいつ頃から動き始めたのか。平成16年4月23日に合併調印式を伝える道新の記事は、「五市町村の合併構想が動き始めたのは、2002年10月だった。飯田ら四町村長は、函館・湯川町の旅館に井上を招いた。まとめ役の飯田が切り出した。「もし、私たちが函館との合併を提案したら、検討に値することでしょうか」井上は一瞬、驚いたような表情を見せたが、はっきりと答えた。「時代の流れとして検討してみる必要はあるでしょう」とのやりとりから知ることができる。つまり、当時の飯田満南茅部町長が井上博司函館市長に持ちよった案件だった。

行政の合併への道を歩むことに対する住民の反応を南茅部町で行われた合併説明会での住民の声から確認してみると、「市町村合併は役場の都合で出てきた話」、「助役も収入役も要らないから、無駄をもっと削れ」、「歯を食いしばって単独でやれないのか」、「合併せざるを得ないのは理屈で分かっても、一言いわないと気が済まないのさ」（平成15年7月29日付「道新」）と反対の声はあったにせよ全体の流れは合併しか道が残されていないとの住民の意識が勝っていたものと推測される。



北海道知事を迎えての合併調印式

合併直後の市民の声は、「旧函館市の東部地区に工業団地を誘致するなど、旧四町村地域からの通勤圏に雇用の場を作してほしい」、「旧四町村でそれぞれ行われている、地域の祭りやイベントが、今後も続けられるよう支援してほしい」、「合併により、旧四町村で過疎化が進まないためにも、水産業の振興などで若者の雇用を確保してほしい」、「祭りをきっかけにお互いの交流が深まり、地域の活性化につながるまちづくりを期待したい」（平成16年12月2日付「道新」）との行政への要望に終止していた。

20年後の函館市合併の検証は、「市財政の各指標は20年で改善した。実質的な収支は黒字が続き、市の貯金にあたる財政基金の残高も増えている。（中略）一方、旧四町村地区では人口減少が加速し、地域に根付く文化や、かつての記憶の継承が難しくなってきた」（令和6年12月3日付「道新」）。「市が発表した財政見通しが波紋を広げた。資材費や人件費の上昇、人口減少に伴う地方交付税の目減りなどの影響で25年度に12億円、26年度に29億円の収支不足となる試算」（同4日付）。「今は住民が声を上げる場がない。昔の役場は地域に密着していたが、支所には足が遠のいた」（同5日付）。全体的な印象は、20年前の大きな課題であった「財政再建」と「均衡ある発展」からの分析を踏襲している。

合併の歴史から何を学ぶのか考えてみた。この問いに合併直後に聞き取りをしている2人の市民の声の中にヒントが隠されている。一人は「地域の将来を考える真剣さが、行政や議会に比べて、住民には不足していた。これが、大きな反対もなく短期間で五市町村が合併に至った理由ではないでしょうか。住民が、こうして「上」か

ら与えられるだけの姿勢では、新市も周辺部から衰退が進むのは明かだと考えます」(平成16年12月4日付「道新」)。もう一人は「新・函館市の誕生を、市民と行政のかかわりを真剣に考える契機としたい。これまでおごなりにされてきた地方自治の在り方を議論するチャンスです」(同5日付)との地方自治の議論が足りなかったことが推測される。

北海道教育大函館校の齋藤征人教授が人口や税収が減る中、行政サービスには限界があるとの指摘をされ、「住民も行政と協働して役割を果たし、汗することが求められている」(令和6年12月5日「道新」)との指摘は20年

前の課題でもあったような印象を持った。このような地域課題を継承することも大切なことで、その抽出には立場を超えた対話が重要であり、その基盤に「地域の歴史と文化の継承」の意味が内包されているとも考える。住民自治で大切とされる「共創」を考えることはさらなる20年後のための問いかもしれない。



ねもと なおき 昭和29年茨城県生まれ、同56年駒澤大学大学院修了、同年市立函館博物館勤務。函館市史編さん室異動、平成12年北海道教育大学函館校に勤務、令和2年3月退職

原稿募集!! 函館の歴史と文化を語り継ぐ・次回のテーマは「我がふるさと“函館”」

函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化の伝承」に因み、会報で函館の歴史と文化をテーマとして取り上げ、会員皆さんからテーマに沿った思いやエピソードを綴っていただき、後世に残していきたいと考えております。11回目を迎える次号の特集「函館の歴史と文化を語り継ぐ」のテーマは、**我がふるさと“函館”**としました。

毎年、話題に上る全国市町村魅力度ランキング、**我がふるさと“函館”**は昨年の市区町村魅力度ランキングで全国1位に輝きました。その紹介文で、開港五都市の一つとして栄えた函館市は、歴史を感じる街並みと、海や山に囲まれた豊かな自然環境を兼ね備えた港町であるとともに、星形の西洋式城郭である五稜郭や函館山から望む夜景などが国内外から高い評価を受けたと説明されています。



ところが「灯台下暗し」と言われるように、函館に住んでいる私たちには意外と気づかない函館のひと・街・文化・歴史などの知らない部分も多くあるように思われます。函館を離れてみて思う**ふるさと“函館”**、函館に移住してみて感じる**ふるさと“函館”**、生まれ育った街**ふるさと“函館”**について、大いに語って頂きたいと思います。

そんな「**我がふるさと“函館”**」にまつわる、会員皆さんの思い出やエピソード、想いなどを次の応募規定によりお寄せください。お待ちしております。

【応募規定】

- 1 「**我がふるさと“函館”**」にまつわる思い出やエピソード、想い
- 2 文章は原稿用紙6枚程度(2,400字)で、関係する写真1枚の掲載も可能
なお、原稿には趣旨を損ねない程度に手を加えることがあります。
- 3 原稿は、封書、FAX、メール等で令和8年7月31日(水)までに函館文化会へ送付ください。
- 4 出来れば、これまでに寄稿されていない会員の応募をお願いします。
- 5 原稿の送付先、問い合わせは
函館文化会事務局 TEL・FAX 0138-57-1175 E-mail bunkakai@host.or.jp

特別寄稿

碧血碑の建立150年

福島 誠



明治8年(1875)9月に函館山の麓、谷地頭^{へっけつひ}に碧血碑が建立されて今年で150年になった。同時に函館碧血会も設立されている。明治8年というのは函館文

化会創立のさらに5年前であり、北海道の団体としてはかなり古いほうだろう。

碧血碑は箱館戦争の負けた側、つまり旧幕府脱走軍(榎本軍)の戦死者の慰霊碑である。戊辰・箱館戦争の経緯については詳述しないが、幕末の大政奉還後に、薩摩・長州が朝廷を味方につけて、クーデター的に権力を奪取したことに納得できない旧幕府軍の一部が抵抗したものだとは私は理解している。当時、旧幕府軍のリーダー榎本武揚は、失業した元武士たちによる北方防衛を兼ねた北海道の開拓、および徳川領地の確保を新政府に要求しているが、今からみると新政府への不服従による脱走が先にあって、あとから理由をつけたようにも思える。

明治2年(1869)の箱館戦争終結時、新政府軍の戦死者は招魂社(現護国神社)に祭られた。旧幕府軍の戦死者の遺体は、新政府が賊軍戦死者の埋葬を禁じていたため、街に放置されていた。その遺体をひそかに回収して葬ったのが、俠客の柳川熊吉と大工の棟梁の大岡助右衛門で、実行寺の松尾日隆師が協力したという。

捕虜になった旧幕府軍の幹部たちは明治5年(1872)に釈放され、榎本武揚を中心に戦友会として集まる中で函館に慰霊碑を作る話がまとまっていった。それが東京の碧血会で、以後、榎本宅を会場に定期的に宴会を行っていたようだが、戦友会の例にもれず戦後50年ほど(大正年間)で活動を停止した。

明治8年(1875)函館に、戊辰戦争・箱館戦争の戦死者の慰霊碑として碧血碑を建立した時に、慰霊と碑の保全という活動を支える現地事務所として函館碧血会ができた。初期の会員は旧幕府軍の関係者で実行寺や北海道東照宮、それに熊吉など地元民が世話人として加わった。

函館碧血会は明治から令和まで活動が途切れずに続き、会員には図書館関係者や郷土史家、最近では新選組の

ファンも加わって毎年の慰霊祭を行っている。現在の会員は約100名で函館周辺が6割、それ以外が4割で、土方歳三人気で北海道外の会員が増えている。年に一度の慰霊祭には榎本、土方、中島三郎助、高松凌雲など旧幕府軍の子孫・縁者も全国から集まっている。ほかに碑周辺の清掃活動や、会員の交流会や会報発行、今の碧血碑の持ち主である函館市への提言なども行っている。

6月25日の慰霊祭

箱館戦争関係のイベントは5月に実施することが多いが、函館碧血会は昭和16年以降、毎年6月25日に慰霊祭を行っている。中島三郎助父子が戦死した旧暦5月16日を新暦にした日である。慰霊祭は仏式で、実行寺の僧侶たちによって執り行われている。最近は、元町子ども園の園児たちによる千羽鶴奉納があり、東家一太郎・東家美さんの碧血碑にまつわる浪曲奉納もある。

碧血碑は上部がオベリスク型、下部は石室となっており、高さ7.6mの石塔になっている。この石は足柄山の小松産で、東京で加工して函館に運び、現地で組み上げたものだ。石組みは精巧で150年経っても崩れたりゆがんだりしていない。

「石室内にはお骨が入っているのですか?」と聞かれることがあるが、墓ではないので入ってはいない。明治8年以来の「経箱^{きょうばこ}」と「霊璽^{れいじ}」(戦没者の御霊の依り代)および「戦没者名簿」が入っている。もっとも、五稜郭などに葬られていた遺体を火葬して碧血碑周辺に埋葬したという記録はあるので、墓としての性格もある。



6月の碧血碑

碧血とは

碧血とは莊子外物篇の「^{ちようこう}衰弘は蜀に死す。其の血を蔵すること三年にして、化して碧と為る」に由来する。

^{ちようこう}衰弘は紀元前500年ころの政治家・学者で、天文や音楽による占いを得意としていた。孔子が教えを乞うた人としても知られる。周の景王の忠臣であったが、陰謀のため罪に問われ、郷里の蜀に追放されたのを悲しんで割腹自殺した。蜀の人が哀れに思っ^{へきぎよく}てその血を地中に隠していたが、三年経ってその血が美しい碧玉になっていたという故事から「碧血」という言葉が生まれ、幕末の武士の間では知られていたようだ。碧血碑の命名には「君に忠義を尽くしていたのに、心ならずも賊軍とされた」という意味が隠されているのだろう。碧玉は今は緑のジャスパーのことをいうが、この場合は翡翠やエメラルドのような宝石だったかもしれない。

遺体を埋葬した二人の親分

令和4年に神山茂賞を受賞した函館碧血会の役員、木村裕俊氏の著書『箱館戦争と碧血碑』によれば

「箱館市街に戦争後の遺体が散乱し、後日住民が収容した遺体は、5月11日に開始された函館総攻撃から16日の千代ヶ岡陣屋の戦いまでの間の戦死者である。(略)この間の戦死者は多くても150名程度であった」とある。

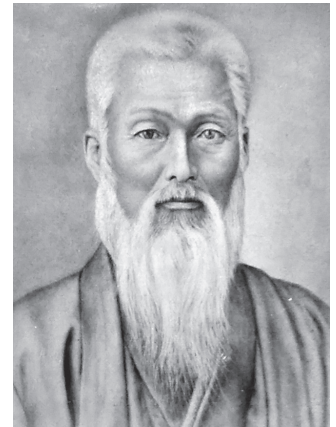
この遺体の収容を主導したのが柳川熊吉と大岡助右衛門の二人と伝わっている。熊吉は浅草生まれの江戸っ子だが、若いころに吉原で働き、箱館に流れついてからは遊廓の用心棒からはじまり火消し隊、土木工事の人夫派遣、料亭、そして賭場を仕切り、街の顔役として様々な争いごとの仲裁を行っていた。箱館戦争当時は600人余の子分をもつ地元の侠客として、「箱館市中取締役」だった土方歳三の手助けや、新政府軍と旧幕府軍との間の秘密の連絡をやっていたそうだ。(熊吉翁語り残し)

熊吉は遺体収容の後、山之上町で芝居見物をしているところを新政府軍に逮捕され、処刑されそうになったが田島圭三の配慮で減刑され釈放された。田島は以前、旧幕府軍の捕虜になって釈放されたことがあり、戦争中に旧幕府軍と秘密交渉を行っていたため、熊吉とは面識があった。終戦後の松前藩では「賊徒熊吉に通じた」という罪状で二人の地元住民が処刑されており、熊吉自身も死刑になるおそれもあった。その後、熊吉は組を解散し、谷地頭に移って料亭を開き、また碧血碑の管理をやっ

て88歳で亡くなった。料亭の跡地は、今は「フルールハピネスはこだて」になっている。

熊吉の話は昭和14年(1939)に廣澤虎造が浪曲にしたことがあり、また、平成12年(2000)には函館出身の笹井邦平の脚本で東家浦太郎が浪曲にした。今は浦太郎の弟子・東家一太郎が毎年、碑前で披露している。

もう一人の大岡助右衛門は函館ではあまり知られていないが、箱館奉行所など五稜郭の木造工事を請け負った中川組の大工として安政5年(1855)に函館に来た。当時23歳と若かったが実力があつたので肝煎(現場責任者)として工事を仕切った。熊吉は五稜郭



大岡助右衛門の似顔絵
(経王寺所蔵)

の土木工事の人夫を手配していたので仕事上での付き合いもあったのだろう。助右衛門は酒とばくち好きだったが人情にあつい親分で、また、熊吉も賭場を仕切る親分だったので、助右衛門と熊吉はおそらく「助さん、熊さん」と呼び合う仲だったろう。助右衛門はその後、札幌に移り、開拓使の工事を請け負って莫大な富を得るが、ばくちと部下の裏切りでほとんどを失い、明治35年(1902)に札幌の経王寺で亡くなる。没後、柳川の求めで分骨し、函館の柳川家の墓に納めているそうで、二人が義兄弟など特別な関係だったことがうかがわれる。

熊吉たちの遺体収容の話が広まるのは明治末で、それまで出てこなかったのはなぜかという疑問を出す人がいるが、誰も聞きにいなかったからだろうと私は思う。熊吉も助右衛門も文字の世界の人ではない。当時の武士は漢文で記録を残したが、助右衛門は文字が読めなかったし、熊吉もひらがなが読めるくらいだったという。武士たちとは住んでいる世界が違う。幕末明治の庶民に歴史の感覚はなく、昔の話は聞かれたら答えるだろうが、記録を残すということはなかったのだろう。

大岡助右衛門を調べた村田専三郎

大岡助右衛門が遺体埋葬にかかわった事を書いたのは、

村田専三郎だけである。以下、昭和18年(1943)編集の『函館工匠小伝』より引用する。

「明治二年脱走軍の遺骸は柳川熊吉翁の義心により碧血碑に留魂する所なりと専ら伝えられるも実は助右エ門檀那寺実行寺庵主を説き尽力を致せし所なり」

(昭和33年刊 函館市中央図書館所蔵原文カタカナ)

村田専三郎は建築家、建築史家で大正10年(1921)から函館工業学校の教師となって、函館の防火建築の普及に努めたが、昭和になってから函館の建築工匠たちの記録を集めた。箱館戦争から半世紀以上が経っているが、まだ、大岡助右衛門と仕事をした職人たちが生き残っていたのだろう。「実は」以下は、村田が直接、老職人から聞いた話に違いない。ちなみに蕎麦の名店、大三坂の久留葉は村田専三郎の旧宅であり、また本願寺函館別院あずまやの四阿にも「村田専三郎設計」の文字がある。

まとめ

碧血碑は、幕末から明治への移行という歴史の転換点に起きた悲劇の記念碑である。また、函館が日本史の表

舞台にたった事件の証拠でもある。箱館戦争の意義は今の常識では判断できないものがあるが、しかし、地元住民が自発的に犠牲者の遺体を埋葬したことは「時代が変わっても逆転しない正義」(やなせたかし)として評価することができる。

「慰霊とは不本意に死んだ人たちを思い出すこと」

この歴史を忘れないために、今後180年、200年と市民の手で慰霊を続けていきたい。

参考文献：

木村裕俊著『箱館戦争と碧血碑』

木村裕俊編・著『復刻版 碧血碑物語』(以上、2点とも函館碧血会刊行 2018年)

『柳川熊吉翁語り残し』<https://www.hekketsu.org/>



ふくしま まこと 昭和30年札幌郡広島村(現北広島市)生まれ、昭和49年苫小牧東高校卒業後、紀伊國屋書店に勤務、平成25年函館蔦屋書店勤務、平成30年函館碧血会会員(現在事務局長)

特別寄稿

“箱館通宝”鉄銭の謎

安 木 新一郎



箱館通宝は、江戸時代末期に箱館(函館)で铸造された、蝦夷地のみに流通が限定された鉄銭である。幕末期、地方貨幣と呼ばれる各藩限定の貨幣が盛んに作られたが、幕府自ら铸造するのはきわめて異例である。なぜ箱館通宝が発行され、その後1年半ほどで発行が停止されたのか考えてみたい。

松前藩の支配

1593年に豊臣秀吉は蠣崎(松前)氏に蝦夷地と交易の統制権を与え、後に徳川家康もこれらを追認した。渡島半島では金が流通したが、アイヌ人との交易は物々交換で、米が計算単位だった。日本の銭はアイヌ人にわたり、松前藩が自領と申告した蝦夷地、すなわち北海道、樺太、

千島、勘察加(カムチャツカ)といった北方地域で寛永通宝は見つかっているが、アイヌ人は飾りとして使っていた。

蝦夷地のクロテンやエゾシカなどの毛皮は清朝が是れとも欲しい物で、また日本側は錦(江南の絹織物)を渴望した。松前とアムール河口を結ぶ山丹交易が形成され、アイヌ人は毛皮を供給した。1667年に樽前山が噴火しエゾシカが急減したことで、アイヌ人同士の争いが激化し、1669年のシャクシャインの戦いを経て、松前藩がアイヌ人に対し優位に立った。松前藩は渡航制限を課して管理を強め、噴火と寒冷化もあいまって弱体化したアイヌ社会は松前藩に従属していく。

松前藩が物々交換を強制したのでアイヌ人は銭を使わなかったのか、それともアイヌ社会の方が銭遣いを受け入れなかったのか、よく分かっていない。幕府は蝦夷地

に鉄銭を運び込んだ。幕府はアイヌ人が銭を求めていると繰り返し主張した。

鉄銭の発行

8代将軍徳川吉宗（将軍位1716年～51年）は「米將軍」と呼ばれるなど、物価対策に苦しんだ。金銀銅が不足し貨幣発行量が減る中、デフレ状態になった。吉宗は①藩札（紙幣）を公認し、②金銀の改鑄をおこなって数を増やし、③寛永通宝鉄銭を鑄造した。銭を青銅製から鉄製に換えることでやはり貨幣量を増やそうとしたのである。吉宗以降、一文銭と言えば鉄銭となった。

吉宗の孫・松平定信（老中1787年～93年）の時代になると、今度は物価上昇が問題となった。浅間山が噴火し、寒冷な気候が続く、凶作の中、商品の供給不足が価格高騰をもたらした。この時、火盗改・長谷川平蔵（宣以）は安い銭を買って、高くなったら銭を支出するという、銭高誘導を実施した。定信は緊縮財政政策を実施し、また、貨幣量を減らすことで物価を下げたが、経済は停滞した。経済成長を軽視する政策は1818年頃まで続いた。

1799年に、幕府は東蝦夷地を直轄地とした。ロシア人の南下に対応するためだった。調査が行われ、アイヌ人への日本語教育および衣食住の日本化と、銭の使用を政策課題とした。幕府は江戸から鉄銭1万貫文(1,000万枚)を送り、アイヌ人との交易決済や労賃として支出した。1807年に蝦夷地全体を直轄化したが、銭が流通したのは東蝦夷地だけだった。1821年に松前藩が戻されると銭は回収されてしまった。

幕府は、蝦夷地におけるアイヌ人への援助や経済開発にとって銭の供給は有効だったと誇ったが、真の目的は、江戸の銭を減らすことにあったと考えられる。

銅銭の流入と上海への流出

1854年に日米和親条約が結ばれ、1855年に箱館は開港され、奉行がおかれた。箱館は内地と蝦夷地を結ぶ結節点だけでなく、海外、特に中国との貿易拠点として急速に発展した。

1856年には漁業や農地開拓に従事する人への手当金や器具の貸与などの特典が与えられ、蝦夷地開拓が本格化した。また、沿岸防備への支出が増大し、外国船も入ってくるようになり、銭需要は一気に高まったが、江戸からの回送を求めても送られてこなかった。

日本各地に貯められていた寛永通宝「銅銭」が箱館に集まってきたが、市中で流通したわけではなかったと考えられる。箱館では「4,200文＝1ドル」で、上海では「1,200～1,300文＝1ドル」という交換比率だった。したがって、箱館で銅銭を買って上海で売り、またドルを銅銭に交換するというのを繰り返すだけで利益が得られた。日本国内では「1,600文＝1分＝3分の1ドル」なので、「4,800文＝1ドル」となる。日本人には1ドルと交換するごとに600文の利益があったことになる。

このような裁定取引は、清朝で寛永通宝と書かれた日本の銭を平気で用いられたから成り立った。漢代から円形方孔の銭を作っていた中国では、時代や国が違っても、円形で四角い穴が開いている、だいたい1匁(3.75グラム)の青銅製の銭であれば受け取られたのである。一方、鉄銭は取り引きされなかった。

箱館通宝の鑄造

1856年には箱館奉行は幕府に蝦夷地限り通用の鉄銭の鑄造を上申した。現地での鑄造の理由として、①物々交換では不正が横行し、アイヌ人は銭の使用を望んでいる、②銅銭の回送は費用がかさむ、③蝦夷地は銑鉄、砂鉄、炭薪が豊富で鑄造費用が安く抑えられる、といった点が挙げられた。

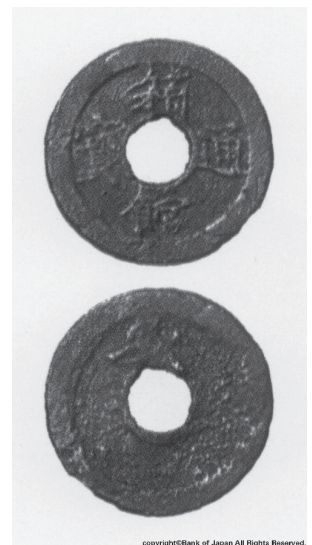
ちなみに、武田斐三郎に

よる古武井の砂鉄を用いた製鉄は失敗に終わった。

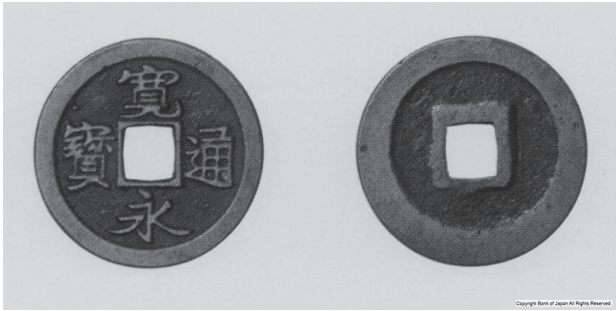
結果的に、南部藩から職人と鉄を取り寄せて、谷地頭で安政4年(1857)2月から鑄造が開始され、閏5月から通用が始まり、安政5年(1858)11月までに10万650貫文、つまり約1億枚の銭が作られた。

箱館通宝は重さ0.8～1匁の鉄製で、寛永通宝鉄銭とほぼ同じだが、表側には「箱館通寶」、裏側には安政を表す「安」が入っている。また大きな特徴として、現行の五円玉と同じく、円い穴が開けられている。

箱館、福山（松前）、江差の3か所に両替商を置き、「6,800文＝金1両」で売り出した。他方、3万貫文は



箱館通宝



寛永14年松本所鑄銭

蝦夷地にまわし、アイヌ人役人への給料や手当、また奉行が巡回する時に配った賑恤や賞与として散布された。政府が現銭を蝦夷地に供給することで、蝦夷地での銭遣いを深化させようとしたのである。

鑄造停止と不人気

発行当初は歓迎された箱館通宝鉄銭だったが、あっという間に敬遠されるようになった。天保通宝（当百文）や文久永宝（四文銭）などが新たに発行され箱館に流入したことで、グレシャムの法則とは逆に「良貨が悪貨を駆逐」してしまった。

現存する箱館通宝を見ると、周りがきちんと磨かれておらず、ざらざらで、いかにも急ごしらえ感が否めない。また、鉄製なのですぐに錆びてくっついてしまう。とはいえ、もし仮に幕府が現地での鑄造を止めさせなければ、もっと品質の良い銭ができた可能性もあっただろう。

蝦夷地で鉄銭自体が受け取り忌避にあったわけではない。谷地頭での鑄造停止後は、わざわざ江戸から船で鉄銭を回送しているのである。鉄銭は武蔵小菅などで作られていた。

幕末、江戸では鉄銭が飽和状態だったとされる。江戸市中の銭の需給を調整するため、蝦夷地に余計な銭を持って行った、と考えられるだろう。幕府は最期まで江戸の武士の利害を中心に考え行動していた。蝦夷地は銭の捨て場所と見なしていたと言ったら言い過ぎだろうか。

箱館通宝の歴史的意義

幕府の金・銀・銭座は、官営でも民営でも商人が請け負って製造する。箱館通宝と同じく、幕府の発行した地方貨幣である但馬・生野銀山「南鐐」や佐渡金山の金貨といった山内通用貨幣もまた請負である。箱館通宝だけが、完全な官営の銭座で作られた、きわめて特異なものである。南部からの銑鉄のインゴットの買い付け、職人

の雇用など、すべてを奉行所がおこなっていた。

完全な官営銭座であったことから、すべての利益は奉行所に入ったはずである。しかしながら、1億枚の鉄銭を作った利益は471両と永（寛永通宝換算で）39文でしかなかった。蝦夷地という植民地の統治の財源を貨幣発行益（シニョレッジ）に求めたが、失敗した背景には、古武井の砂鉄が利用できなかったことが大きいと考えられる。なぜ溶鉱炉が建設できなかったのか。

世界全体を見渡すと、19世紀後半から、各地で使われていた小額貨幣や貝貨が徐々に市場から退場し、金本位制の枠内で中央銀行が発行する紙幣や硬貨に代替されていく。日本でも幕末の銅銭は文久永宝のような4文や、天保通宝に至っては100文であり、最小単位の1文でしかない鉄銭は市場から排除されていく方向にあった。だいたい後ではあるが、明治5年太政官布告第283号で「寛永通宝鉄銭＝16分の1厘（1,000厘で1円）」と定められるが、鉄銭は超小額貨幣であった。

鑄造された時には、箱館通宝の役割はほぼ終わっていたのだ。

まとめにかえて

箱館通宝鉄銭の研究に関する史料や論点は、彌永芳子『箱館通寶鑄造の顛末 一銭座限り通用紙幣一』、北海道貨幣史研究会、昭和52年(1977)において網羅的にまとめられており、本稿でも参考にさせていただいた。

まだ分かっていないことや、今後も謎のまま残ると思われることは無数にある。彌永(1977)の副題である「銭座限り通用紙幣」というのは、鉄銭鑄造に関わる職人たちに給料を支払わなければならないが、銅銭はなく、鉄銭もできていない中、銭座の中の商店でのみ使用可能だった紙幣である。紙幣の現物は残っておらず、詳細も不明である。

南部藩から職人と鉄のインゴットを入手したが、仙台藩などでも鉄銭は鑄造していた



函館公園内にある箱館通宝の碑

(仙台通宝)から、別の藩から呼んできてもよさそうである。箱館の有力商人と南部藩の関係についても興味は尽きない。また南部藩における藩の許可や黙認といったものに加え、密造を含めた貨幣鑄造の実態を知ることが、箱館通宝の謎の解明の鍵となるだろう。蝦夷地という植民地経営の資金を貨幣発行益でまかなうという発想を、箱館に赴任した、あるいは江戸にいた箱館奉行に提案した者が南部藩にいたのかもしれない。

本論における最大の仮説は、幕府は蝦夷地を江戸で余った鉄銭の捨て場に使っていたという点である。今後も考えていきたい。



やすき しんいちろう 函館大学教授、択捉島水産会理事。昭和52年兵庫県生まれ。平成22年大阪市立大学大学院経済学研究科後期博士課程単位取得満期退学。経済学修士。外務省在ウラジオストク日本国総領事館専門調査員などを経て、令和5年より現職。

特別寄稿

函館山から下ろされた観音様

筒井英順



湯川寺境内に遷座されている三十三観音様は、昔函館山にあったものである。

称名寺の歴史によると、西国地方へ行けない人々のために函館山に分霊所を実現しようという人が現れた。この人は称名寺の檀家で蛸子長兵衛という大変な旧家で観音様の信仰者であった。

称名寺の当時の住職第十三世巖碩上人、十四世実含住職と共に努力し、十五世霊含上人の時(1834年)に完成したものである。この観音様は阿波の花崗岩で造られ、高田屋金兵衛の船ではるばる西国から運ばれてきたものである。高田屋では尊い事業の事だからと運賃は無料とした。この事は、観音様の背面に「大阪大津屋栄徳新造積下り」と銘が刻まれている。

函館山の配置場所が決まると、西国33所から採取の土をそれぞれ台座の下に埋められた。そのためこの観音様を移土観音としたものである。安政元年(1864)にペリー提督一行の来航があった時の「ペリー提督日本遠征記」に当時の観音様を描いた図は八番の観音様と思われ湯川寺に現存している。市民の三十三観音への信仰は大変なもので4月8日には巡拝があり、特に春秋は山かけで多くの人々が函館山に登り参拝した。参拝は全山を廻り、納めの札所である33番目で称名寺へ帰るようになっていた。

山かけは市民に信仰と娯楽の対象として親しまれていたが、明治32年(1899)函館山全山が要塞となり、一般人の立ち入りが禁止され観音様も函館山から下ろさなければならなくなり、山の裾野に集結させていた。その後、湯川村民の強い要望により、大正3年4月湯川地区郊外に遷座配置することが決定した。大正3年(1914)4月19日の新聞には「船見町の称名寺、9時、紅白の幕で包んだ観音様を荷馬車の上に積む。これを見送る人、観音講150名、百万遍講200人、地藏講、弘法講、稚児等も入れ千人、11時に簡単な式をして出発、吹き流しを先頭に数十台の馬車、大門まで行列をし、大門から稚児や附添人は特別電車で湯川へ。馬車は湯川消防組の金棒を先頭に旗吹き流し、33台はこれに続いて電車線に添い鮫川橋に着いたのは2時30分、湯川橋には湯川小学校生徒、湯川婦人会会員、村長、村会議員、その他、村の善男善女多数が出迎えた」とある。称名寺から霊場の土砂が運ばれ



大正3年、三十三観音を函館山から湯川へ移したときの様子
(場所は湯倉神社前)



ペリー提督遠征記に描かれている函館山の観音様

5月2日遷座式が行われた。

その後、山かけ法要は春秋2回（4月と10月）つとめてきたが、函館市の都市計画等で道路の拡幅、変更により観音様は放置され、管理するものもいなくなった。そこで湯川寺第三戒蔵上人が引き取り昭和50年10月湯川寺境内へ移動集結遷座させてお参りしてきましたが、平成16年区画整備事業のために再び観音様を移動することになった。

度々の移動で観音様の下に敷いた西国の土は無くなったので、湯川寺檀家役員皆様での会議の結果33の札所を巡拝して土を採取し持ち帰る計画を立て、第四世住職が信者延べ90名と共に3年がかり（通算13日間）で西国33観音札所を巡拝し、霊場の土を採取して平成19年10月5

日遷座法要を厳修し、庭園型「西国移土三十三観音」として管理している。遷座式の様子は平成19年11月11日放送「NHK・BS にっぽん心の仏像」で放映された。

湯川寺境内の観音様の台座の下と観音様の前にあります踏み石の下に西国の土が納められている。永年の間に新しく作られたり、取り替えられたりして、銘が無いもの、消えたものが数体ありますが「西国移土三十三観音」が永くこの地に安住することを念じている。 合掌



湯川寺境内の観音様

（参考）湯川寺開基百年記念誌、

湯の川物語（著者・門脇義治）



つつい えいじゅん 昭和29年函館市生まれ、大正大学浄土学卒業後、日本体育大学に編入学し昭和54年卒業、大学時代の昭和51年に全日本カヌー選手権で優勝、昭和59年湯川寺副住職、平成3年住職

番号	山号	寺名	ご利益
1	那智山	青岸渡寺	不老長寿の滝水
2	紀三井寺	金剛院	縁結びの寺
3	風猛山	粉河寺	厄除開運
4	横尾山	施福寺	転機に「吉」となる
5	紫雲山	葛井寺	1043の手で苦難解消
6	壺坂山	南法華寺	眼病封じ
7	東光山	岡寺	日本最初の厄除け墓場
8	豊山	長谷寺	病氣平癒
9	興福寺	南円堂	羅刹で衆生を救う・漁業の守護
10	明星山	三室戸寺	運氣・勝気・金運 花の寺
11	深雪山	上醍醐寺	子授け、夫婦敬愛
12	岩間山	正法寺	雷除け、ばけ封じ
13	石光山	石山寺	金銀財宝福德
14	長等山	三井寺	救世・利人
15	新那智山	観音寺	ばけ封じ・頭痛封じ
16	音羽山	清水寺	安産、子育て
17	補陀洛山	六波羅密寺	悪病退散
18	六角堂	頂法寺	病氣平癒
19	革堂	行願寺	除災招福
20	西山	善峯寺	試験に落ちないお守・神経痛、腰痛守り
21	菩提山	六太寺	身代わり観音
22	普陀洛山	総持寺	料理上手なる観音
23	応頂山	勝尾寺	勝運観音
24	紫雲山	中山寺	安産（腹帯奉納）
25	御嶽山	清水寺	延命（おかげの井戸）
26	法華山	一乗寺	病氣平癒（孝徳天皇）
27	書写山	圓教寺	六根清浄の寺
28	世野山	成相寺	美人観音
29	青葉山	松尾寺	ベットの守り観音
30	巖金山	宝蔵寺	金宝富貴授け観音
31	姨崎耶山	長命寺	健康長寿の観音
32	巖山	観音正寺	本尊御身拭い散華
33	谷汲山	華嚴寺	満願成就



函館文化会事務局からのお知らせ

函館文化会への図書等の寄贈

会報「巴響」第86号の発行（令和6年10月）以降、函館文化会に次の図書の寄贈がありました。寄贈いただきました皆様に感謝申し上げます。なお、図書等は函館文化会に大切に保存しておりますので、閲覧を希望される方は申し出下さい。

- ・「温故知新」（毎月）（発行 七飯町郷土史研究会）
- ・「遺愛学院史探究～歴史を飾る遺愛ゆかりの群像～」
（著者 作山 宗邦）
- ・「松前藩 家臣名簿」
（著者 久保 泰）
- ・「翔たけ 第32号」
（発行 一般社団法人小笠原アカデミー教育振興財団）
- ・「函館観光俳句集「LoveHAKODATE ～好きです函館～」第1集」
（発行 函館国際俳句会）
- ・「日刊政経 2025年・新年特集号」
（発行 日刊政経情報社）
- ・「歴史は現代をうつす鏡」
（著者 根津 静江）
- ・「小さな親切 第89号」
（発行 「小さな親切」運動 函館支部）
- ・「令和6年度（2024年度）第22回青春海峡文学賞 作品集録」
（発行 北海道高文連道南支部文芸専門部）
- ・「レイモンさん 函館ソーセージマイスター」
（著者 植松三十里）
- ・「カール・レイモン ヒストリー『胃袋の宣教師』」
（発行 函館カール・レイモン工場）
- ・「社会福祉法人函館共愛会創立90周年記念誌」
（発行 社会福祉法人 函館共愛会）
- ・「貨幣が語る ジョチ・ウルス」
（著者 安木新一郎）
- ・「創刊40周年記念号 文芸誌『視線』第15号」
（発行 視線の会）
- ・「kanto カント 第6号」
（発行 北海道高文連道南支部文芸専門部）
- ・「使える!用字用語典」
（著者 小林 肇）
- ・「函館市民文芸 第64集」
（発行 函館市中央図書館）
- ・「函館大学論究 第56輯 第1号・第2号」
（発行 学校法人野又学園 函館大学）
- ・「函館古地図・古写真複製カレンダー2026」
（発行 NPO法人函館市青年サークル協議会）

「函館文化会メールレター」を配信します

函館文化会では、「函館文化会メールレター」を配信準備中です。このメールレターは、函館文化会が行う事業の案内や報告、お知らせなどのほか、函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化の伝承」に関する情報などを会員に幅広くお伝えしていく予定です。

メールレターは、令和7年度中に本格的な運用を目指し、8月1日に創刊準備号として入会申込書にメールアドレスを記載された会員宛てに配信しました。届いていない方で配信を希望する会員の方は、下記の函館文化会メールアドレスに「メールレター配信希望」とメールをお願いします。

★配信の新規登録、解除は ⇒ E-mail : bunkakai@host.or.jp

■□———■
【函館文化会メールレター】創刊準備 第1号——2025/08/01
 ■□———■

【函館文化会メールレター】は、函館文化会が行う事業の案内や報告、お知らせなどのほか、函館文化会が取り組む「郷土の歴史と文化の伝承」に関する情報提供などを含め、会員皆様に幅広くお伝えいたします。

メールレターは、令和7年度中の本格的な運用を目指しており、このたび創刊準備号として函館文化会入会申込書にメールアドレスを記載された会員を対象に配信しました。お読みいただきご意見、ご感想をお聞かせいただければ幸いです。

~~~~~

**1 函館文化会「講演会」の開催について**

~~~~~

既にご案内しておりますが、函館文化会「講演会」のお知らせです。

● 会員を募集しております ●

函館文化会では「郷土の文化を顕揚し、その振興発展を図ることを目的」に活動を続けていますが、この趣旨に賛同いただける方を募集しています。

皆さんの近くに入会いただける方がおられましたら電話、FAX、メールなどで文化会事務局にお知らせいただけませんか。「入会申込書」をお届けいたします。

● 函館文化会の助成制度について ●

函館文化会では、郷土文化振興事業の一環として郷土文化団体が函館市内において開催する講演会、展示会及び芸能発表会などに対し予算の範囲内で助成を行っています。

事業の実施前に申請を受け、審査の上助成の可否決定いたします。詳しくは、文化会事務局にお問い合わせください。

会務報告

令和6年度 函館文化会 事業報告及び収支決算

5月28日に開催された令和7年度定時総会において、令和6年度函館文化会事業報告及び収支決算が承認されましたので、その内容についてお知らせいたします。なお、事業報告、収支決算等についてのお問い合わせ及びご意見、ご要望がありましたら事務局にお寄せください。

令和6年度 事業報告

1 郷土の文化を掲揚し、その振興を図るため、次の事業を実施した

- (1) 「神山茂賞」贈呈式の開催
 - ・日 時 11月7日(木) 午後4時30分
 - ・会 場 函館国際ホテル
 - ・受賞者 神山茂賞 久保 泰 氏
贈呈式後、受賞記念講演及び受賞者を囲み祝賀会を開催
 - ・受賞記念講演
演題：「家臣名簿の編集を終えて」
- (2) 講演会の開催
 - ・日 時 10月12日(土) 午後1時30分
 - ・会 場 函館市中央図書館 視聴覚ホール
 - ・演 題 「もし箱館に黒船が来なかったら」
～ペリー来航170周年に想うこと～
 - ・講 師 井上能孝氏
(箱館英学研究家・函館国際俳句会会長)
- (3) 第13回「市民公開講座」の開催
 - ・日 時 8月24日(土) 午後1時30分
 - ・会 場 ロシア極東連邦総合大学函館校
 - ・演 題 「幕末開港期から明治初年の函館とロシア語」
 - ・講 師 倉田有佳氏
(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)
- (4) 第14回「市民公開講座」の開催
 - ・日 時 3月12日(水) 午後1時30分
 - ・会 場 函館競輪場 テレシアター
 - ・演 題 「函館競輪がもたらしたもの」
 - ・講 師 伊与部 隆 氏
(公益社団法人全国競輪施行者協議会常務理事)
田村隆弘氏
(函館市競輪事業部長)
- (5) 第19回「卓 話」
 - ・日 時 5月28日(水) (総会議案審議終了後)
 - ・演 題 「地域学のみかた・楽しみかた+ (プラス)」
 - ・講 師 根本直樹氏
(北海道教育大学函館校非常勤講師)
- (6) 会報の発行
 - ・会報「巴響」第86号を10月1日発行

2 文化活動を行う団体・個人への後援・協賛助成事業を実施した

- (1) 後援事業
 - * 第121回研鑽会「日本舞踊の会」5月12日

函館邦楽舞踊協会

* 函館朗読紀行vol. 18

「函館開港ゆかりの物語を紐解く」7月20日

函館朗読奉仕会

* 第22回青春海峡文学賞 8月24日

北海道高等学校文化連盟道南支部文芸専門部

* 第100回赤光社公募美術展 10月1日～10月6日

赤光社美術協会

* 第12回「古典の日」朗読会

「紫式部日記を紐解く」11月1日

函館朗読奉仕会

* 第49回「小さな親切」作文コンクール 12月13日

「小さな親切」運動函館支部

以 上 6事業

(2) 協賛・助成事業

* 第121回研鑽会「日本舞踊の会」

* 函館朗読紀行vol. 18

「函館開港ゆかりの物語を紐解く」

* 第22回青春海峡文学賞

* 第100回赤光社公募美術展

* 第49回「小さな親切」作文コンクール

以 上 5事業

3 函館文化会が行う事業の運営協議のため、次の会議を開催した

(1) 総 会

ア 定時総会 5月28日(火)

於：プレミアムホテル-CABINPRESIDENT-函館
(議 題)

ア) 議 案

* 令和5年度事業報告について 承 認

* 令和5年度収支決算及び監査報告について

承 認

* 役員(理事・監事)の選任について

選 任

イ) 報 告

* 令和5年度収支補正予算について 了 承

* 令和6年度事業計画について 了 承

* 令和6年度収支予算について 了 承

ウ) その他

* 函館文化会「講演会」の開催について

了 承

(2) 理事会

ア 第1回理事会 5月28日(火)

於：プレミアムホテル-CABINPRESIDENT-函館
(議 題)

- (ア) 協議事項
 * 令和6年度定時総会提出議案について 承 認
 * 任期満了に伴う役員（理事・監事）の選任について 承 認
 * 企画委員会の体制の見直しについて 承 認
 * 会員の異動（退会）について 承 認
 * 事務局長の採用について 承 認
- イ 第2回理事会 5月28日（火）
 於：プレミアホテル-CABINPRESIDENT-函館
 （議 題）
- (ア) 協議事項
 * 会長、副会長、常務理事の互選について 決 定
 * 顧問の選任について 選 任
 * 企画広報委員の選任について 選 任
 * 神山茂賞選考委員会委員の選任について 選 任
 * 函館市文化団体協議会理事の推薦について 決 定
- (イ) その他
 * 今後の日程について 了 承
- ウ 第3回理事会 9月27日（金）
 於：函館大学 1階 会議室
 （議 題）
- (ア) 協議事項
 * 令和6年「神山茂賞」について 決 定
 * 会員の異動（入会・退会）について 承 認
- (イ) 報 告
 * 企画広報委員の選任について 了 承
 * 講演会の開催について 了 承
 * 職務執行状況の報告について 了 承
- (ウ) その他
 * 今後の日程について 了 承
- エ 第4回理事会 1月28日（火）
 於：函館国際ホテル
 （議 題）
- (ア) 会長欠員に伴う、新会長の互選について 選 任
- (イ) 報告事項
 * 令和6年度事業実施状況及び予算執行状況について 了 承
- (ウ) 協議事項
 * 令和7年度事業について 承 認
 * 第14回市民公開講座の開催について 承 認
 * 会員の異動（入会・退会）について 承 認
 * 企画広報委員会委員の選任について 選 任
- (エ) その他
 * 今後の日程について 了 承
- オ 第5回理事会 3月26日（水）
 於：函館大学 会議室

- （議 題）
- (ア) 協議事項
 * 令和6年度収支補正予算（案）について 承 認
 * 令和7年度実施事業（案）について 承 認
 * 令和7年度収支予算（案）について 承 認
 * 会員の異動（入会・退会）について 承 認
 * 「講演会」及び「卓話」について 承 認
- (イ) 報 告
 * 会長、副会長、常務理事の職務執行状況の報告について 了 承
- (ウ) その他
 * 今後の日程について 了 承

(3) 諸会議

ア 神山茂賞選考委員会

令和6年神山茂賞受賞候補者として推薦があったものを8月20日（火）に選考委員会を開催し、慎重な審議の結果「神山茂賞」として久保泰氏を受賞候補者として答申した。

イ 企画広報委員会

函館文化会が実施する事業の企画・立案に携わるとともに、その開催・運営にあたっている。本年度の委員会の開催日数はこれまで9回（持ち回り委員会を含む）で、主なる実施・担当した事業は次のとおりである。

- ・函館文化会の実施する事業の企画・立案・策定・運営
- ・講演会、市民公開講座、卓話の講師・演題等の協議及び運営
- ・「後援名義使用申請」及び「助成金交付申請」の審査

4 その他

(1) 函館文化会ホームページの運営

函館文化会の知名度の向上と事業活動推進のため、函館文化会の歴史や概要、事業の内容及び開催、報告などの情報インターネットを通じて会員はもとより全国・世界に発信することを目的に平成29年4月1日に函館文化会ホームページを開設し、運営を行っている。（アドレス、<http://hakodate-bunkakai.com/>）

● 企画広報委員会委員 ●

函館文化会が実施する事業の企画・運営、会報の編集は、現在5名（理事2名、会員3名）の企画広報委員が担当しております。委員は次のとおりです。

山本 真也、中野 晋、今泉 香織、
 根本 直樹、丸藤 競

令和6年度 函館文化会 収支決算書

(単位：円)

科 目	予算現額	決 算 額	対予算比	備 考
I 事業活動収支の部				
1 事業活動収入				
基本財産運用収入	5,112,000	5,192,100	△80,100	
会 費 収 入	348,000	352,000	△4,000	
事 業 収 入	16,000	26,400	△10,400	
受 取 負 担 金	189,000	189,000	0	
助 成 金 収 入	120,000	120,000	0	
寄 付 金 収 入	20,000	20,000	0	
雑 収 入	1,000	245	755	
事業活動収入計	5,806,000	5,899,745	△93,745	
2 事業活動支出				
(1) 事業費支出	3,648,000	3,639,790	8,210	
①文化振興事業	2,971,000	2,963,490	7,510	
事務手当	1,273,000	1,273,000	0	
顕 彰 費	100,000	100,000	0	
会 議 費	562,000	546,649	15,351	
旅費交通費	56,000	56,600	△600	
通信運搬費	171,000	171,272	△272	
消耗品費	70,000	70,170	△170	
印刷製本費	331,000	331,100	△100	
委託料	23,000	22,580	420	
賃 借 料	48,000	47,520	480	
諸 謝 金	165,000	164,507	493	
助 成 金	60,000	60,000	0	
負 担 金	106,000	106,500	△500	
雑 費	6,000	13,592	△7,592	
②土地賃貸事業	677,000	676,300	700	
事務手当	234,000	234,000	0	
通信運搬費	6,000	5,530	470	
租 税 公 課	371,000	371,500	△500	
委託料	49,000	48,720	280	
雑 費	17,000	16,550	450	
(2) 管理費支出	1,851,000	1,870,442	△19,442	
事務手当	717,000	717,308	△308	
退職手当	100,000	100,000	0	
会 議 費	138,000	137,405	595	
旅費交通費	142,000	142,670	△670	
通信運搬費	108,000	107,420	580	
什器備品費	86,000	85,800	200	
消耗品費	36,000	56,271	△20,271	
印刷製本費	7,000	6,600	400	
委託料	203,000	203,182	△182	
賃 借 料	246,000	246,016	△16	
負 担 金	33,000	33,000	0	
雑 費	35,000	34,770	230	

科 目	予算現額	決 算 額	対予算比	備 考
(3) 法人税、住民税及び事業税	512,000	512,400	△400	
法人税、住民税及び事業税	512,000	512,400	△400	
事業活動支出合計	6,011,000	6,022,632	△11,632	
事業活動収支差額	△205,000	△122,887	△82,113	
II 投資活動収支の部				
1 投資活動収入				
(1)特定預金取崩収入	400,000	400,000	0	
神山茂顕彰積立金 取 崩 収 入	200,000	200,000	0	
事業運営調整資金 積立金取崩収入	100,000	100,000	0	
退職給与引当金 取 崩 収 入	100,000	100,000	0	
(2)特定預金借受収入	200,000	200,000	0	
事業運営調整資金 積立金借受収入	200,000	200,000	0	
投資活動収入計	600,000	600,000	0	
2 投資活動支出				
(1)特定預金繰入支出	300,000	300,000	0	
創立150周年記念事業 積立金繰入支出	100,000	100,000	0	
事業運営調整資金 積立金繰入支出	200,000	200,000	0	
(2)特定預金返済支出	200,000	200,000	0	
事業運営調整資金 積立金返済支出	200,000	200,000	0	
投資活動支出計	500,000	500,000	0	
投資活動収支差額	100,000	100,000	0	
当期収支差額	△105,000	△22,887	△82,113	
前期繰越収支差額	417,000	417,601	△601	
次期繰越収支差額	312,000	394,714	△82,714	

〔注記事項〕

- ・「予算現額」は、令和6年度第5回理事会（令和7年3月26日）で議決した収支予算補正後の額。
- ・II投資活動収支の部 1投資活動収入 (1)特定預金取崩収入は、次のとおりである。
「神山茂顕彰積立金取崩収入」は、「同積立金のうち200,000円」を取り崩し、「I事業活動収支の部 2事業活動支出 (1)事業活動支出 ①文化振興事業 顕彰費に100,000円、会議費の贈呈式関係経費に100,000円」をそれぞれ充てたものである。
「事業運営調整資金積立金取崩収入」は、「同積立金のうち100,000円」を取り崩し、「I事業活動収支の部 2事業活動支出 (1)事業活動支出 ①文化振興事業 印刷製本費で会報等の刊行物発行経費」に充てたものである。
- 「退職給与引当金取崩収入」は、職員退職支給基準により100,000円を前事務局長の退職給与手当に充てたものである。
- ・II投資活動収支の部 2投資活動支出 (1)特定預金繰入支出は、次のとおりである。
「創立150周年記念事業積立金繰入支出」は、函館文化会が令和13年に迎える創立150年を記念し行う事業の費用に充ててを目的として100,000円を「同積立金」に積み立てたものである。
「事業運営調整資金積立金繰入支出」は、将来の事業運営資金として200,000円を積み立てるものである。

